



# 農工通信

*The Graduates' Association of  
Tokyo University of Agriculture and Technology*



No. 86  
2014.1

- 平成26年度通常総会に一般会員も構成員として参加できます ▶ 詳細は巻末頁
- 「農工通信」No.88号用の寄稿文を随時募集しています ▶ 詳細は巻末頁
- 同窓会名簿に関するアンケート調査にご協力ください ▶ 同封のはがき

東京農工大学同窓会  
<http://www.tuat-dousoukai.org/>



## 追悼

「西尾邑次名誉会長の逝去を悼む」	畑中 孝晴	農 S31	1
「西尾邑次同窓会名誉会長の死去を偲ぶ」	小林 壽	製糸S24	2
< 遺稿 > 良き友を持つことのよこび	西尾 邑次	農S17・9	2

## I わが母校に活力を！ ～元気になろう農工大～

1. 農工大をもっと元気に	羽石 達生	農化S36	3
2. 工学部改組50周年とわたし	田口 朋之	物生院H9	4
3. 未来は私たちがつくる！！	島村 次郎	化シスH20	5
4. 大学をもっと身近に	安藤 範親	連農H21	6
5. 「技術とコミュニケーション」で鬼に金棒	山本佳世子	工博化H23	7

## II 大学といまを結ぶ

### II-1 クラスの絆

1. 山楮会の活動	岡部 廣二	林 S35	9
2. 同級生 半世紀の絆	武田 迪昭	織工S36	10
3. 50年目のクラス会	畑 泰之	織工S37	11
4. 「KEYAKI 欖46」より	八代 和博	織高S46	12
5. 「昭和43年度農学科入学生同級会」の軌跡	鈴木 一郎	農 S47	13

### II-2 サークル等の絆

1. 東京支部と「けやきクラブ」	馬場 信行	林 S35	14
	渡辺 彰	農工S43	
2. ワンダーホーゲル部OB会の山荘について	伊田野耕二	工化S39	15
3. 史跡探訪会OB会の活動	水谷 朝己	製糸S47	17
4. クラブ活動が人生の糧	菅野 茂樹	織高S49	18
5. 「青鷹の会」発足の顛末	向後 晋一	織高S52	19
6. 時の流れ = 節目の三話 =	古賀 淳士	農院S54	20
7. 緩やかな関係	柳田 開	農 S57	20

### II-3 忘れ得ぬ農工大

1. はるかなる青春の駒場寮	太田 道明	農工S42	21
2. 東京競馬場のおかげで農工大に入学できました	平茂 寛	農 S54	22
3. 10年かけて「伝えること」を学びました	戸金 悠	連農H24	24

## III 仕事に生きる

1. 市議で最後のご奉仕を	殿岡 修	機械S39	25
2. ホントのようであてにならない話	鈴木 眞雄	製糸院S52	26
3. 伊予生糸を支える有形文化財	池上 正彦	蚕糸S52	27
4. これから	福澤 徳穂	植防S55	28
5. 土佐の「いごっそう」	豊田 陽一	蚕糸S57	28
6. 温泉宿のあるじ	箕浦 章浩	環・資院H8	30
7. 福島県での復興に携わって ～国民の大学 農工 OH!～	中川 信次	農環院H14	31
8. 国立公園づくりを通して	高橋 瑛子	環資H22	32

## IV 技術に生きる

1. 和紙と炭と電池の電極	京谷 陸征	織工S38	33
2. 研究者としての縁	石川 泰弘	製糸S41	34
3. 「地方試験場の研究室」曲折記	村田 公夫	農工院S47	35

## V 人生これから

### V-1 輝く第二の人生

- |                          |       |        |      |
|--------------------------|-------|--------|------|
| 1. ボランティア活動10年を通しての雑感    | 大沼 紀幸 | 織工S38  | ……37 |
| 2. ただいま林業の担い手育成中         | 白井 久  | 林 S44  | ……38 |
| 3. 泉の森をふるさとの森に           | 大濱 昭  | 農工S45  | ……39 |
| 4. 第二の人生に生きがいを求めて        | 山崎 正澄 | 織高S46  | ……40 |
| 5. 平居雑記 英語活動「ハローフレンド」12年 | 宮城 清  | MOTH19 | ……41 |

### V-2 人生いろいろ

- |                        |       |        |      |
|------------------------|-------|--------|------|
| 1. 卒業後半世紀を越えて          | 勝田 謙次 | 織化S34  | ……43 |
| 2. ジャングルに魅せられた独立行路     | 小橋川朝政 | 織高S49  | ……44 |
| 3. 定年を迎えて……そして、あの頃に戻って | 吉野 明  | 織高院S54 | ……45 |
| 4. ひょんなことから            | 岡崎 恭久 | 農化S58  | ……46 |

## VI 世界につなぐ

- |                     |       |         |      |
|---------------------|-------|---------|------|
| 1. 江蘇省（常州）奮闘記       | 河村 吾郎 | 織高S55   | ……48 |
| 2. 米国ペンシルベニア州立大学滞在記 | 有馬 卓司 | 工博電H15  | ……49 |
| 3. 仕事場は七つの海         | 樋口 和久 | 機シス院H20 | ……50 |

## VII 趣味を楽しむ

- |                             |       |         |      |
|-----------------------------|-------|---------|------|
| 1. 「北斎に消された男」と「ダーウィンに消された男」 | 藪田 順一 | 織工S37   | ……52 |
| 2. 吉田貞次郎と松浦武四郎              | 吉田 譲  | 獣医S45   | ……53 |
| 3. 私とラグビー                   | 鈴木 大介 | 織工S41   | ……54 |
| 4. そこに鐵路のある限り               | 蘇原 佳威 | 電気S58   | ……55 |
| 5. サイクルツーリズム                | 大友 淳也 | 環・資H7   | ……57 |
| 6. 世界最大のメガシティ東京を駆け抜ける       | 白井 久一 | 物生院H12  | ……58 |
| 7. ロードバイクでしまなみ縦走            | 濱田 浩  | 機シス院H22 | ……59 |

## VIII 一言もの申す

- |                   |       |        |      |
|-------------------|-------|--------|------|
| 1. 風評被害について       | 塚田 進  | 化工院S50 | ……8  |
| 2. サークル顧問のつばやき    | 渡辺 元  | 獣医S54  | ……51 |
| 3. 震災から2年、今、前を向いて | 根本 文宏 | 植防S61  | ……60 |

## IX よもやま話

- |                     |       |       |      |
|---------------------|-------|-------|------|
| 1. 生死の挟間で幻覚が訴えかけたもの | 関口 英樹 | 物生H10 | ……36 |
| 2. 日米親善に薄寒桜の由来      | 武永 順次 | 元教官   | ……47 |

## 広 告

……61

## 前事務局長に聞く

亀山 秀雄 化工S48 ……63

表紙絵 : 『春の誘い』丸山富男（織高S46） 一般社団法人「示現会」所属。2年ごとに個展開催。  
表紙のことば : 峰松敏夫（農S47）

“桜の国”と言われる日本。春には全国各地の公園に、街路に、河川沿いに、華やかな桜の花が咲き誇る。四季の移ろいを地元の花とともに暮らす人々の心を魅了する。

桜は、時代を超えて歌に詠まれたり、絵画のモチーフとして親しまれてきた。丸山富男さんの絵にも桜を描いた作品が多い。重厚感あふれる幹、くねりながら伸びる枝、無数に重なり合う花びら。桜の木全体が生命の力強さを醸し出している。「ちょっと話しかけてみたい」…ふと、そんな衝動に駆られ、思わず微笑んでしまう。今年も桜の最も輝く瞬間を逃すことなく、画布を通じて新たな永遠の美を生み出してくれるに違いない。

そして私達の多くは、いつものように桜花爛漫の季節到来を心待ちにする。大きな感動とひとときの安らぎを求めて。

『 さくら花おそしと待ちし世の人を驚かすまで咲きし今日かな 樋口一葉 』

## お悔やみ申し上げます

東京農工大学同窓会名誉会長の西尾邑次さんが昨年7月23日、永眠されました。鳥取県知事としての輝かしい功績を残された後、平成11年度から4年間、同窓会第6代会長として会員相互の連携強化を推進されるなど、同窓会発展にご尽力いただきました。



## 西尾邑次名誉会長の逝去を悼む

同窓会名誉会長 畑中 孝晴 (農S31)

今年、樹齢200年を超えるご自宅の椎の木の前で、ご夫妻がお元気な姿で写っている年賀状を頂いたので、こんなに早く亡くなられるとはと驚きました。賀状には92歳になりましたが、毎日を大切に明るく楽しく過ごしたいと書かれていましたので、相変わらずお酒を飲みながら、元気に悠々自適の生活を送っておられるとばかり思っておりました。

西尾さんは、温厚篤実なお人柄で知られ、鳥取県知事を4期16年の長きに亘ってお務めになり、県政の発展に尽くされました。その後も県内外の要職にあって多忙な日々を送られましたが、同窓会の集まりや入学・卒業式などの行事には積極的に参加しておられました。

西尾さんは、平成11年から14年まで同窓会長を務められ、多大の貢献をなされました。平成10年秋に、前任の同窓会長である久保田富一郎氏が発起人代表となり、東京農工大学創立50周年記念事業後援募金会が発足しました。この事業には、大学の教育研究活動の充実、国際交流のほか、50周年記念会館の建設などが計画されておりました。久保田会長からバトンタッチされた西尾さんは、予てより同窓生の集まれる場をつくりたいと願っておられましたので、同窓生を中心とした募金活動には、とりわけ熱心に取り組まれました。その結果、大学ご当局のご理解も得て、我々にとっては同窓会館ともいえる記念会館が立派に完成し、現在、総会後の懇親会など

に活用されております。また、隣接して事務室、会議室を備えた同窓会室も建設されました。

西尾さんは、長年鳥取支部の会長を務められ、支部の状況や地方の会員の気持ちを良く理解しておられたので、支部活動の活性化、情報の発信にはとても熱心でした。こうしたことが、平成13年のホームページの開設や懸案であった東京支部の設立に繋がったものと思われまます。

平成14年、西尾さんから、次の同窓会長として推薦されたら受けろという電話がありました。知事さんとは格が違う、結構、歳なので高校の同窓会長も辞めました、と申し上げたのですが「何を言うか、君は昭和生まれでまだ若い、協力してくれる方が沢山いるから大丈夫だ、わしは飛行機で行くが君は自転車だ、きめ細かく仕事出来るはずだ」といわれ、農林水産省、農林公庫時代に大変お世話になっていたので、とうとうお引き受けすることになりました。

しかし、頼りなく思っておられたのでしょうか、会長を退かれた後もお目にかかるごとに、大学や同窓会の近況を問われ「大学も法人化などの変革の時期にあるのだから、幅広く目配りをしてしっかりやれ」とハツパを掛けられました。

西尾さんは、出雲地方の方言で「ありがとう」のことを「だんだん」と言うんだといわれ、この言葉をよく使っておられました。いつまでも、同窓会のことを気に懸けて頂き、いろいろとご指導賜ったことに対し、お別れに当たり、心を込めて「だんだん」と御礼を申し上げます。

心からご冥福をお祈りいたします。

## 温厚堅実笑みのリーダー 西尾邑次同窓会名誉会長の死去を偲ぶ

鳥取県支部代議員 小林 壽 (製糸S24)

温厚堅実の模範とされ多くの人々に愛された西尾邑次本会名誉会長(92歳、農S17・9)は、去る7月23日夜、肺炎のため死去しました。5月下旬に脳梗塞で倒れ、麻痺の残った右手足等のリハビリ生活を送っておりました。告別式は7月25日、鳥取市服部のメモワールイナバで営まれました。元鳥取県知事ということで県内外の政財界の関係者等約600人を超える多くの参列者に惜しむ声が相次ぎました。

西尾先輩は、鳥取県西部の旧長田村(現南部町)の出身で、1947年(昭和22年)、県職員となり異例の出世街道をひた走り企画部長や総務部長、副知事を歴任し、歴代中央からの知事が続く中であって1983年(昭和58年)から連続4期16年にわたり県政

のかじ取りを務めました。

私との出会いは、私が1952年(昭和27年)4月に鳥取県に赴任した時、当時先輩は人事課の職員で、この年の大山での夏季研修の時からで、それから60年の長さを超えております。話題が豊富で会議の進行が上手で会員に好感を受け、特に懇親会では得意の演技で会を盛り上げていました。温厚な西尾先輩の温情によるものと本会の支部役員を分担したことと思います。本会の会長を引き受けてからは他の数多い役職を辞退し、熱心に会長職を全うしたと思います。晩年には支部長を事ごとく辞退しておりましたが、負担になることは私が代行するからと無理をお願いして続けて戴きました。最近では聴力の衰えと足腰の負担があり大変だったと思います。4月に今年の本部総会の事で奥様を加えて電話連絡をしたことが最後の公務となりました。

謹んで冥福をお祈りいたします。

**【遺稿】** これは、平成25年4月4日にご投稿いただいたものです。

## 良き友を持つことのよろこび

西尾 邑次 (農 S17・9)

私達同期の者は、昭和17年9月に東京高等農林学校を卒業いたしました。本来なら18年3月にすべきところ、16年12月8日に大東亜戦争が始り、大学、高等専門学校の在學生は半年繰上げて兵役に服する制度が施行されたからであります。

私も、軍隊生活に入りましたが、北支那にありました保定幹部候生隊で将校教育を受けた以外は、幸か不幸か戦地に行くことなく内地で終戦を迎えました。

戦後は、皆がそれぞれの立場で職を持ち、日本の復興に努力を重ねているとき、同期の甲府市在住の石田 真君の発案により、東京高農の同期生会を開くことになりました。

最初は、昭和53年4月15日に東京銀座の「植むら」で13名が集まり再会を喜び、語り合い、時間の経つのを忘れる程でした。あとで、石田君からの便りで判ったことですが、卒業した同期の者は43名で、現存者15名、戦死者10名、病死者16名、消息不明2名となっています。

その後、場所を替え、関東・関西を始め、各地で開催し、会を重ねること31回にも及びました。

平成20年5月14日、東京で開催した際には、母校東京農工大学を訪れ、学校当局のご配慮により、現在の学校を案内していただき、同窓会事務所で昼食を共にいたしました。

翌日は、靖国神社にお参りいたし、同期の集まりは、今回限りにすることになった次第です。

振り返ってみますと、31回にも及ぶ同期生会が楽しく実施できたことは何と言っても同期生の甲府市在住の石田 真君の配慮によるところが多大であります。

同氏は、同期生会の開催に当たり、その都度、開催地の観光の資料等を毎会の開催前に調査し参加者に配布する等行き届いた手配をしてくれ、参加者は何の心配もすることも無く、楽しむことが出来たのは、石田君のお蔭であり、あらためて、すばらしい良き友人に感謝し、かさねてありがとうございます。

同期の友人の御健勝をお祈りいたします。

石田君の丁寧さを示す資料として、第32回の同期生会の資料を添付すればいいのですが、字数の関係で、これで終わりといいたします。

## I. わが母校に活力を！～元気になろう農工大～

### 1. 農工大をもっと元気に

羽石 達生 (農化 S36)

卒業後既に半世紀以上が経過した。この間、ずっと母校の活躍ぶりを注目してきたが、地味ではあるが、農学部・工学部のそれぞれの領域におけるアカデミックな教育・研究活動、更には産業界、ひいては市民生活の向上・発展に貢献されてきたことには心から敬意を表したい。しかしながら一般的な市民目線からの農工大学に対する認知度は、残念ではあるが低レベルを推移していて、一向に上向きの気配は認められず、卒業生の一人としてもどかしい思いを抱きながら日々を過ごしていた。

そんな折に、2006年頃であるが、同期の斉藤実君から誘われて、工学部と農学部の卒業生からなる、「農工大および農工大発ベンチャー企業を支援するグループ」の活動に途中から参加した。工学部出身の深水智明氏を中心になって活動していたが、大学側との接点や支援の内容の模索に多くの時間を費やしてきた。大学に認知してもらうために有限責任中間法人エー・ティー・ネット（法改正から一般社団法人を経て、現在は解散して任意団体）を設立するなど、農工大同窓会や農工大産官学連携センターとの提携を模索する日々が続いた。その後、関係者の努力が実を結び、産官学連携センターとは、同センターの事業の一部である、ビジネスプラン作成セミナーなどへの支援に参加するようになった。また、大学関係者に

よる出願特許について異なる業種とのマッチングの研究や個人ベースではあるが複数の農工大発のベンチャー企業に対する経営や研究開発支援を行ってきている。

最近になり、他大学との差別化を含め、一般および地域住民の農工大に対する認知度をもっと向上させたいとの強い想いで設立された工学部の学生諸君のサークル「向友会」との共同作業も動き始めた。農工大教育研究振興財団の支援の一環として、同財団主催の市民講座の開催支援などはその具体例である。2011年12月に工学部で「イノベーションを聴く一人に優しい技術-クルマの安全・安心」、2012年6月に農学部で「同、食の安全・安心」の開催に、同窓会と共に協力して支援活動を行った。このような経緯を重ねた結果、2012年12月14日付で、これまでの同窓会の部会に加えて、新たに「活動内容の類似した集団部会」の設置が認められ、希望する同窓会員は規程や細則に則り、申請が可能になった（同窓会ホームページ参照）。我々「エー・ティー・ネット」も、新しい部会制度の集団部会（新名称；農工大支援ネットワーク）に申請することにより、公認の活動基盤が与えられることになり、これまでとは一皮むけた活力ある活動が期待される。設立当初から苦勞されてきたグループの先輩諸氏には深甚なる敬意を表したい。

しかしながら、農工大支援ネットワーク集団部会（旧 エー・ティー・ネット）の平均年齢は高齢化しているため、今我々に最も望まれる課題は、工学部の向友会のメンバーのような若い人たちの参加を如何に増やすかである。農学部ならび

に工学部の若い世代の同窓生による集団部会への積極的な参加を切に期待する次第である。

(国際開発薬事コンサルタント)

農工大支援ネットワーク；<http://www.at-netz.jp/>

## 2. 工学部改組50周年とわたし

田口 朋之 (物生院 H9)

私は農工大の修士課程を経て某企業に就職いたしました。その後、その企業を辞職し博士後期課程に再入学し学位を取得いたしました。農工大とは卒業後も深く関わりをもっており、既に人生の半分以上は農工大と関わっております。そんな農工大の工学部も改組50周年という節目のときを迎え、記念行事として農工大工学部改組50周年記念シンポジウムが開催されました。僭越ながら他の卒業生の方と共に、「イノベーションとこれからの50年」と題してお話しをさせていただきました。

私は、研究開発を担当しておりますが、技術開発に限らない新たな価値を創り出すという活動にも取り組んでおります。やる気充分に業務に励んでおりますが、農工大に入学して以降、紆余曲折様々な出来事がありました。

そんなエピソードを私のモチベーショングラフという形で紹介させていただきました。私が学位を取得するために大学に出戻った経緯などについて話しをさせていただきました。大学に戻った一番の要因は在学中に学業をおろそかにしたつもりはありませんでしたが、企業研究者として力不足を感じたためでした。業務を遂行しながらの能力向上も可能だと思われま。しかし、そこで時間が掛かりすぎるという懸念に引きずられました。その問題は努力で克服できることとも思われましたが、一

生に一度くらいは自分を追い込んでみるのもよいのではないかと思い決心いたしました。そして先のグラフもこの辺りから右肩上がりの奇跡を描いていきました。今はイノベーションを起こそうという大きな目標にチャレンジさせて頂いております。

最近、よく思うこととして新しい技術を開発し応用して研究を進展させるためには、その分野の専門知識を身につけることは必要であります。次のステップへ進むためには別の能力が重要だと痛感しております。そのような能力は逆に大学などでは身につけにくい能力のような気がしております。しかし、教員一人あたりの共同研究数などではトップクラスの農工大ということもあり、実践力を備えた人材育成プログラムが始まるようです。求められる能力に応じて人材教育も変わっていくものとは思いますが、私からすると羨ましい限りです。

これらに加えて、私がイノベーション創出のために必要なことは①“場”、②複数の専門性、そして③Passion、と感じています。①については色々あると思いますが、よくTVなどでも紹介される多様性を生むような“場”から、ニーズを嗅ぎ取るための現場という意味に近い“場”まで広い意味を持っていると考えています。②についてもよく聞かれる話しとなってきましたが、融合領域にイノベーションの種を育てる土壤があるように感じています。最後にPassionというと根性論のように思われがちですが、やはり最後は情熱をもって取り組めるかは大きな要因だと感じています。私もPassionを持ち続け、モチベーションをうまくコントロールして社会に貢献していきたいと思っています。

### 3. 未来は私たちがつくる!!

島村 次郎 (化シス H20)

卒業して6年が経った今でも、大学へ行くと後輩が喜んで迎えてくれます。「母校にいつでも帰って来られる場所がある」それは私が思い描く向友会の理想像でもあります。

寮寮での生活、少林寺拳法部での活動など、かなり濃厚な大学生活を満喫しているように思えましたが、レポートや部活をこなし、寮やバイトの同僚（先輩）と話すくらいしかなかった私の生活範囲は意外と狭いものでした。何かを始めたいという強い気持ち（若さ）だけにはありましたが、何をしたらいいのかわからずモヤモヤした気持ちで2年間が過ぎていきました。しかし、学部2年の時に受講した向後先生の特許法の授業で、知財運用に興味を持ち、都内の法律事務所の週末勉強会に飛び入り参加することで、私の人生観は大きく変わりました。多くの社会人と触れ合うことで、世間の広さを実感したからです。

研究生生活が始まると、週末勉強会やバイトの時間は、今までのようには取れなくなりました。「何とかして研究と技術経営の勉強の両立を図りたい」と、教授に相談をすると「専門職大学院（MOT）で知財マネジメントの授業がある。深夜にアルバイトをして時間をWASTEするよりも、君は勉強をしながらお金を稼げばいい」とティーチングアシスタント（TA）に推薦をして下さいました。当時のMOTは学生の半分近くが社会人で、夕方から始まる白熱教室はどれも魅力的で知の摩擦の連続でした。また社会人に混じり講義後の飲みニケーションに繰り出すのも大きな楽しみの一つでした。大学院、社会人の先輩たちに、企業見学や海外調査、経済人クラブ等にも連



れて行って頂き、研究生生活だけでは決して得られない経験をさせて頂きました。貴重な経験のなかでも、I先輩から言われた、「私たち先輩には何も返さなくていい。その代り島村が将来、先輩の立場になったときには、お前のできる範囲で後輩にしてやってくれ。世の中はそういう風に回っているんだよ」という言葉が今でも強く心に残っています。人生の岐路に悩む中で、いつも素晴らしい先生や先輩、同僚に恵まれたことは本当に幸運なことでした。

東大の大学院に進学し、様々な大学・社会人と触れ合う中で、やはり、「学部生の内から広い視野を持つべきだ」、「何か後輩のためにできないか?」と考え、熊谷氏と長嶺氏と協力をして学生団体設立に向けた活動を開始しました。仲間を集めビラを作り、土曜日の朝早くから正門でビラを配り、一人ずつ学生を集めました。「後輩たちのために若い私たちが（今）始めるしかない」というのが共通の思いでした。

幅広い分野、年齢層の人と付き合い、憧れの先輩（ロールモデル）が出来るような機会を提供することで、学生の高いポテンシャルを相乗的に育成・発信することができます。そこで、本誌をご高覧下さる先輩方には、農工祭や同窓会、向友会のイベントに積極的にご参加頂き、少しでも現役の学生と話をする機会を作って頂ければと思います。このような交流は、学生だけでなく卒業生の人生観を変えるような素敵な出会いとなると信じています。

卒業から6年、東門・エリプスの増築などキャ

ンパスは綺麗になり、Twitterやfacebookでの情報発信が導入され、大学の様子は大きく変わってきています。この様なプラスの流れを大きな潮流とし、輝かしい未来をつくるのは、他の誰でもなく私たち卒業生と学生なのです。

#### 4. 大学をもっと身近に

安藤 範親 (連農 H21)

東京農工大＝東京農大？勘違いされるのはいつものこと、日本では、大学を評価するときに外見としての知名度が優先される傾向にあります。

農工大と関係の深い皆様は、大学教育と研究・技術の中身に自信があるだけに、「勘違いされたくない」、「世間に知ってほしい」という思いを持っているのではないのでしょうか。「外見じゃない中身だ」と自負する現状です。

しかし、「『いい人』だけど……」というように中身がいいだけでは注目されません。でも、母校は世間に知れた自慢できる大学であってほしい、そういったジレンマを抱えているのではないのでしょうか。

そのような中、大学は創基140周年を来年度に迎えます。大学はブランドイメージ向上のために大学キャラクターを制定し、オリジナルグッズの展開もするそうです。キャラクターは広く公募され、この原稿が皆様に届くころには、既に決定していることだと思います。

知名度やブランド力に課題を抱えた現状を脱するためにも私はこの企画に大賛成ですが、140周年記念キャラクターという一過性のものに終わってしまうのではないかと危惧もしています。

最近のキャラクター関連消費ビジネスは、各地に「ゆるキャラ」があふれており、成功している

ものは熊本県の「くまもん」などごくごく一部で、多くの失敗が見られます。

収入源の限られる大学から見れば、キャラクター関連消費ビジネスによる知名度と収益力の向上は大変有用な取り組みですが、成功させるためにはさまざまな努力も欠かせません。

最も重要な成功要素は、キャラクターの世界観の作り込みです。キャラクターの背景にあるストーリーが受け入れられて初めて愛されるものになりますし、関連商品ビジネスが成功します。農工大が舞台とされている漫画の「もやしもん」のキャラクターも、ストーリーなくキャラクターだけでは大きく注目されなかったと思います。

過去を振り返ってみると、農工大はシンボルマークであるロゴを変更しましたが、学生の受けは芳しくありませんでした。表層的な部分を変えたところで意味がなく、知名度やブランド力の向上には、学生だけでなくOB・OGの皆様も含め、農工大に対して、誇りを持てたり、好きになったりという想いを強くしていくような、認識を変える作業が必要になります。ただ、その作業は大学の教職員だけに求めるものではなく、学生やOB・OG等の関係者で作っていくものではないのでしょうか。広く世界を見渡せば、東大や慶応大、米スタンフォード大学などのように、OB・OGの活動が活発な大学が高いブランド力を誇っています。



農工大コミュニティフォーラムロゴ  
<http://www.facebook.com/noko.community>

農工大を見るとOB・OGは約4万7千人いますが、同窓会会員同士の交流にとどまり、OB・OGと大学とのコミュニケーションは農工通信などに限られるため、あまり活発な活動は見られません。

農工大に対するOB・OGの愛校心の強さを考えると、この現状は大変もったいないと思います。OB・OGと大学のつながりを深め、もっと農工大を世界に誇れる大学にできないものでしょうか。

そのための最初のステップとして、まずはOB・OG農工大を身近に感じられるようにしようと、私は農工大に関係する活動を皆様に、また皆様から広く知らせるための場所として農工大コミュニティフォーラムをFacebook上に立ち上げました。運営は、向友会の学生が担っています。

ぜひ、皆様にご活用いただき、農工大に関する情報に触れることで、大学とのつながりを感じていただければと思います。

## 5. 「技術とコミュニケーション」で鬼に金棒

山本佳世子 (工博化 H23)

産業専門紙の日刊工業新聞で13年の間、大学・産学連携の記者をしてきて思うのは、「実力のわりに一般の知名度が低い、という筆頭の大学が東京農工大学ではないか」ということだ。国の目玉事業のほとんどで採択され、卒業生や共同研究における製造業での評価は高く、若手研究者育成のテニュアトラックも全国の大学の手本となっている。にもかかわらず魅力が十分に伝わらないのは、理工系単科大学の強みである技術のコミュニ

ケーションが、簡単ではないためと考えられる。

「これは素晴らしい！」と感じた技術をはじめとする事柄を、職場の仲間や仕事相手、友人や身内などに伝えたのに、相手の反応が悪くてがっかりした経験があるだろう。その時は「相手の関心が違っていた」「技術に対する理解のレベルが低かった」と考えたかもしれない。しかし、こんなふうに振り返っているだろうか。「相手がよく理解できるように伝えられなかった、こちらが悪かった」と。

コミュニケーションというと、「いかに自分の考えを発信するか」に重点が置かれる傾向がある。しかし、「相手は何を求めているか」「相手のために、どのような情報を伝えるのか」と気を配ることこそがより重要だ。なぜ、自分の意と異なる解釈をされるのか？情報を受信する人のとらえかた方を理解することで、情報を発信する場合のコミュニケーション力も大きく向上する。少し前に、技術コミュニケーションを主題とした書籍、「研究費が増やせるメディア活用術」（丸善出版）を記し、刊行することができた。農工大には、産学官連携と技術のコミュニケーションという特異なテーマで、博士号（学術）をとらせていただいた。その恩返し意識もあり、「技術にかかわる人の力になりたい」とこれを執筆した。

科学技術の研究は伝統的に、現象を細分化し要素にわけて新たなものを見いだす分析型だった。



しかし近年は、さまざまな要素技術を組み合わせ、価値を生み出す統合型が重要になっている。農工大が重視する環境・エネルギーや農工連携もそうであり、画期的なものは融合によってしかできないといわれるほどだ。技術としての異分野や、大学と企業など異業種の融合である。イノベーション（変革）は、専門性の異なる組織や人々とのコミュニケーションで導くしかない。大

学関係者の研究でも、教育でも、社会人の産学官連携でも、ビジネスでも、それは同じだ。

幸い、農工大関係者はベースとなる要素技術という得意なものがある。高い専門性を持つ農工大関係者が、異なる人々とコミュニケーションする力を付ければ、「技術とコミュニケーションで、鬼に金棒」。農工大関係者にはそれが可能だと強く思っている。

## 一言もの申す ①

### 風評被害について

塚田 進（化工院 S50）

現在の日本では一般に、化学物質、農薬、添加物等、人工的・工業的に合成された物質は、天然物に対して危険なもの、人体に有害な物として、嫌われている。養殖と天然の魚、通常の野菜と無農薬／有機栽培野菜、通常の食品と無添加食品を並べて同じ価格で売られていたら、科学を勉強した人でも殆どの方は、後者の方が美味しい、健康に良いと判断して後者を買ってしまう。残念ながら、これが日本の現状ではないかと思えます。

私は、化学工学科修士課程を1975年に修了し、総合化学会社に就職して38年間、もっぱら化学物質の製造に関わってきました。担当した化学物質は、合成染料、殺虫剤、除草剤、合成香料、合成樹脂、添加剤等、まさに健康に悪そうな物ばかりです。

化学物質がこれほど嫌われるようになった原因は、1960～70年代の高度成長期における大気・水質汚染、DDT／PCB／ダイオキシン等の内分泌攪乱物質、シックハウス問題、化学工場の火災爆発・有害物質の漏洩、農薬による中毒死、地下鉄サリン事件等、化学に関係した不幸な出来事が頻繁に起こり、「化学工場は危険な薬品を使って危険な物質を造っている」というイメージが多くの人に植え付けられた為かも知れません。

しかし、化学工場で造られる化学物質も原料の石油や天然ガスは元々天然物であり、どこまでが天然物か人工物か、非常に曖昧です。農作物も元々、人間に食べられるために生きているわけでは無いので、美味しく栄養が多く含まれるように栽培することは、自然とはかけ離れたことだと思います。また、天然物が人工物より安全である、という根拠は何も有りません。食塩より毒性の低い農薬もあります。農薬は、新規化合物が発見されてから、何10億円もかけて膨大な安全データを取って、市場に出されています。戦後、食糧難の時に、農薬は農産物の増産に貢献しましたし、私たちは若い時から添加物の多く含まれた食品を毎日食べてきたお陰で、健康で長生きしています。これだけ、科学的データがあるのに、過去の事件やイメージだけで、化学物質が悪者扱いされる理由が分かりません。こういうのを風評被害というのでしょうか。

日本は産油国から遠く離れているため原料価格も高く、化学産業の競争力はどんどん低下していますが、化学物質に対する風評被害もボディーブローの様に効いていると思います。私は、これまで生産中止に追い込まれた製品をいくつも見てきました。定年を過ぎてから、国外での生産を検討するためにインドに3回も出張しましたが、本当に会社や日本の為になるのか疑問に感じています。

風評被害は、化学物質に限ったことではありません。科学立国と言われる日本ですが、日本人はその名に恥じない科学知識と判断力をもう少し身につけて欲しいと思います。

## Ⅱ. 大学といまを結ぶ

### Ⅱ-1 クラスの絆

#### 1. 山梧会の活動

岡部 廣二 (林 S35)

昭和35年3月の農学部林学科卒業生は33名であった。卒業前に卒業後お互いに連絡を取り合うことを約束し、このために「クラス会」を結成することにし、その会の名称は幹事を引き受けてくれた馬場信行君に任せることにした。その馬場君が命名した会の名前が「山梧会」である。そして、毎年原稿を募集して、お互いに近況を知らせあい、あるいは自分の考え方を発表するために、毎年1回会誌を出そうということとした。

この申し合わせに対して、良いことであるが、せいぜい3、4年続けられれば良い方だなと言う声が聞こえて来ていた。しかし、卒業した昭和35年に創刊号を発行してから、毎年1回、「武蔵野山梧会」誌を欠かすことなく発行し、平成22年に第51号を卒業50周年年号として発行した。武蔵野山梧会誌については、かつて、宮城県の井上勝弘君が紹介しているので詳細は省略する。今年も第53号の発行を目指して、原稿募集の通知を発送したところである。

山梧会の幹事は最初、馬場君にお願いしたが、面倒見の良い同君の努力と、印刷業自営と言う条件により、武蔵野山梧会誌の発行の基礎は固められ、現在では、毎年原稿を出してくれる会員がほ

ぼ決まっており、編集はだいぶ楽になっている。馬場君の後、荒井宏君が幹事を引き受けてくれて、会は順調に運営されてきた。その後、平成17年になり、荒井君から筆者が幹事を引き継ぎ、平成22年から、青柳幹夫君と筆者が幹事を勤めている。

山梧会の行事は、言うまでもなく、武蔵野山梧会誌の発行が第1であるが、原則として毎年、東京近郊の会員による新年会を開催している。しかし、平成24年からは遠方からの会員の参加者も出るようになった。この新年会は、原則として毎年1月の第4日曜日に行うこととして、会場は第1回目から同じお店である。開催日時と開催場所が決まって居ると言うことは幹事にとり大変都合がよく、同時に会員にとっても都合のよいことが多い。実は、会員の住む地域の行事が、たまたま重なるので、今年も欠席ですという会員もあるが、この原則は守っている。会場の都合等により開催



山梧会の平成25年新年会

日が変更される場合には、このような会員は大変喜んで出席してくれる。

今年の新年会も原則どおり行い、例年より少ない9名の出席者があった。この新年会の最後は、通常「ペロリ節」でメるのだが、今年は会場の都合により、「ペロリ節」でメることはできなかった。写真は、暮石裕君撮影の今年の新年会参加者の集合写真である。やはり、卒業後52年も経つと年相応に見える。

これからも、できる限り長くこの会を維持・運営してゆきたいというのが、会員一同の希望である。取りあえず次の大きな行事は5年毎に行っている全国に居る会員に呼びかけての総会を平成27年中に行うことである。その時はまた母校の皆様にご迷惑をお掛けすることになるかも知れませんが、その節にはよろしく願い致します。

---

## 2. 同級生 半世紀の絆

武田 迪昭 (織工 S36)

---

平成25年4月23日、喜寿を過ぎた者、まぢかな者11名が、比叡山にのぼり延暦寺根本中堂を参拝した。1200年、不滅の法灯に守られた伝教大師ご自作の本尊、薬師如来坐像に家内安全・身体健康・病気平癒をお願いした。卒業53周年のクラス会行事の一端です。繊維工学科S36年卒業組(30人)の絆を紹介します。

平成22年5月24日熱海で50周年記念クラス会が実施された。この節目に伊藤寛郎君が55ページの写真入り記録冊子を同級生に配布されたので、級友一同驚嘆感謝でいっぱいでした。学生時代の4年間は新入生歓迎会の写真から始まっている。いつも世話幹事役を引き受けた伊藤寛郎が半世紀の

絆の要であり今後も皆から期待されている。

36会と命名した集会のスタートは1986年(昭和61年)、卒業25年後であった。

その後、場所は東京が多かったが、17回実施された。周年記念は東京から離れた場所で一泊することになっている。40周年記念は豊橋、45周年記念は和倉、50周年記念は熱海。

そのほかに36会ゴルフ同好会でも絆を深めた。1996年(平成8年)から20回の実績を残した。又、囲碁愛好者数名が毎月1回手合わせをしており今も続いている。見事な同級生の絆です。

冒頭のクラス会、53周年の京都一泊の話題に戻ります。この京都一泊会は愛知県日進市在住、高橋卓司君の綿密な行動スケジュールで、京都観光も十分に堪能しました。前回熱海会の三浦半島観光中に、次回京都の世話役を申し出てくれました。東日本大震災で予約を取り消し、1年後再予約し諸連絡に、二重手間をかけてくれました。

会食しながら近況報告や母校の思い出等で語りあいました。S36卒は殆ど就職したが、商社、繊維関連会社、大学の教職関係など分野は違っても就職先のため、高度成長のために役割を果たした仲間であった。現役引退後、地域社会で活動している仲間も多い。マンモス団地や地域自治会町内会の長、シルバーの教養福祉活動の長、いろいろの分野でもリーダーの役割りを果たし社会貢献をしている連中である。

喜寿になって母校を思うと感謝の念が湧く。包容力愛情ある先生方、社会生活の基礎も習得できた。寮生活で上下関係友達付き合いも学習できた。クラブ活動運動部に熱中した同級生も多い、野球・空手・剣道・弓道・ラグビー・自動車部。学生旅行の思い出にも花が咲いた。学業に全力投球をしなかったとの反省が多いが、この時期に社会で生きる栄養を沢山吸収したのだと思います。今回は未定だが喜寿から米寿に向け自己管理を誓

い解散した。鬼籍に入った4人の同級生に改めてご冥福をお祈り致します。合掌。



卒業53周年のクラス会

### 3. 50年目のクラス会 (昭和37年度繊維工学科クラス会-37会)

畑 泰之 (織工 S37)

平成24年11月6日に37会クラス会を母校の小金井キャンパス内で開催した。今回の37会クラス会の趣旨は、この年、つまり平成24年は、当クラス会のメンバーが母校を卒業した年(昭和37年)から数えて、丁度50年目に当たる記念すべき年で有った事、と当会のメンバーの多くが、母校を卒業してからは、母校を訪れたことがないという状況であった事から、皆で母校に集まって50年前の思い出を共有しようと言うコンセプトの実現にあった。

当日は、当会のメンバーが母校を卒業した当時は存在してはいなかったJR中央線の東小金井駅から各自歩いてもらい、卒業当時には存在していたものの、誰もがその存在に気がつかないでいた

東門(桑畑の最東端)からキャンパス内に入ってもらい、上記東門に隣接したキャンパス内の一角に、平成23年12月に建設された、東京農工大学140周年記念会館『エリプス』内の会議室に集合してもらい、そこで会食後、同館内の同窓生が使用出来るラウンジを見学した。

その後、当クラス会のメンバーが卒業した当時の学内キャンパス内の建物配置図を片手にもって、学内ツアーに出発した。

先ず、当『エリプス』の裏手側、つまり大学キャンパス内の東南の角地一帯は、かつて、繊維工学科の各研究室や実験室、紡績及び織機工場が集中していた地区である。

然しながら、この地区での50年後の現在では、それら当時の各種の建物の痕跡を示すものは全くなく、7号館(情報工学科)、10号館(生命工学科、情報工学科)、9号館(機械システム工学科)、20号館(CAD/CAM実習棟)及び産官学連携・知的財産センター等の近代的なビルが林立し、当時の面影は、全くなかったが、処どころに残っている大樹が僅かにその当時の風情を感じさせるものであった。



50年目のクラス会(小金井キャンパスにて)

この東南の角部地区から少し、西側に向けて歩き、当時物理学教室があった場所を経て、本館の玄関前に至り、しばし本館の外観を眺め、当時を

偲んだ。当本館の建物は、幸い当時のままの状態  
で残されており、内部は科学博物館として使用さ  
れている。

一旦、本館前を通り過ぎて、大学の正門に到着  
した。当正門の構えは当時とは多少異なっていたが、その位置は当時と変わらず、そこで、記念  
写真をとりながら、しばし、当時の思い出に浸る  
ことができた。

その後、本館の正面玄関から本館内に入り、内  
部を見学した。内部の構造は殆ど当時のままであ  
り、各部屋は博物館の展示室として利用されてお  
り、昔懐かしい、紡績機、織機、編み機、糸繰機  
棟が展示されていた。

又、本館2階の階段脇には、かつて坂奥研が  
あったが、現在は資料展示室となっていた。

次いで、本館の北側にある裏口から外にでて、  
当時、講義棟、講堂、図書館等があった地区へ向  
かったが、当時の講義棟の一部と講堂があった地  
点は、公園の様な広場になっており、当時の講義  
棟の一部と図書館があった地点は、工学部の講義  
棟が建設されていた。

そこから少し北上して、西門の方向に歩くと、  
かつてテニスコートがあった一画に到達したが、  
テニスコートは無く、大きな庭園状の広場に変  
わっていた。そこから更に西門の方向に歩き、  
西ヶ原寮のあった場所に到着した。

勿論、当時の西ヶ原寮は無くなっており、現在  
は、体育館が建設されていて当時を偲ぶものはな  
かったが、当時の寮の前にあった桜の木数本が、  
当時よりもかなり大きくなって成長していたこと  
が、当時を思い出させるものであった。

又、西門に隣接して旧弓道場の後と思しき風情  
も確認出来た。

その後、当寮の玄関と思われる地点から体育館  
の裏手を歩いて当時、寮の各棟と食堂及び風呂場  
を繋ぐ渡り廊下のあったと思われる細い通路に

沿って歩き、野球場とラグビー場を兼ねた運動場  
に出た。

当運動場は、当時とほとんど変わらない形を有  
しており、当時と同じ雰囲気を示しており、バッ  
クネットが当時よりも大きく且つ立派になってい  
た。

以上、駆け足の学内ツアーであったが、参加者  
のメンバーの一人ひとりが、50年前の記憶と現状  
との間の大きなギャップに驚くと同時に当時の思  
い出をメンバー間で話し合うことが出来た事は、  
一つの小さな幸せであったと確信している。

その後、当会のメンバーは、奥多摩の青梅の宿  
に移り、本日の体験も踏まえて、夜遅くまで飲  
み、喰い明かして旧交を温めた。

---

## 4. 「KEYAKI 櫻46」より

八代 和博 (織高 S46)

---

東北大震災で東北の地形・歴史は変わりました。  
更にあの原発で福島の未来まで変わってしま  
いました。でも、私はこの福島が大好きです（出  
身鹿児島県）。冬は雪がたんと積もり、夏はそれ  
なりに暑い、それ故ははっきりとした春と秋が来  
る。すなわち、しっかりとした四季を有した日本  
では貴重な地域なのです。

去年は、その福島に「KEYAKI 46」が集まり  
ました。AKB48みたいで大袈裟ですが……。織  
維工学科池田研しかも学生寮「櫻」昭和46年卒業  
の4人組（丸山・土田・佐藤・八代）です。卒業  
後は年賀状程度で繋がってた仲間が、現役を辞め  
た頃から誰彼ともなく、集まって飲んで・遊ぼう  
と始まった会なのです。丸山・土田君・小生の3  
人は昭和42年から周辺桑畑のなかの「櫻寮」で居

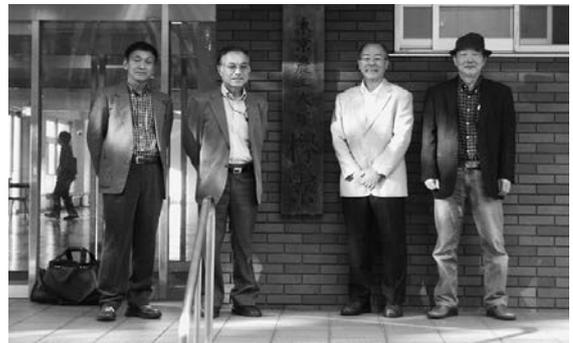
住した仲間であります。仕送りも少ない同志、1杯のラーメンを回し食い、1人分の食券で寮食を交代で食べて、生きてきた戦友なのです。又、流行りのフォークギターを奏で、民青・革マルに盾突く超ノンポリ寮生。しかし、何故かこの3人空冷車800ccパブリカを共有したシャレた学生でもあったのです。櫛寮の同期に黒田君（製糸）とか、鳥袋君（工業化学）、サッカー先輩でもある谷賀寿男さん（現トーア紡社長）、篠原さんなど……は今どこでどうしてるんだろう？。

「KEYAKI 46」の1人であった大和田君（弓道部）は一昨年他界しました。一度もこの会に参加できないまま……。彼は池田研の仲間でもありました。池田研は、池田先生・壁矢助手（当時）の指導のもと画期的な紡績設備「オープンエンド；空気精紡」の設備・理論開発していたゼミでした。池田先生は亡くなられ、壁矢さんは今母校に生き字引的存在でご活躍中ですが、当時他ゼミにも若い助手の方々が多くおられました。まさか10数年後に勤務先で、堀之内・目黒さん達とお会いするとは……。両氏は、当時企業で流行りのTQC（Total quality control）の先生（当時；日本能率協会勤務）として指導をうけました。その他織工同期では千田君（現母校同窓会役員）、山本君、森田君、城代君など櫛寮集会室に泊り込み、期末試験出題範囲をシェア勉強した懐かしい面々が思いだされます。あちこちの分野で活躍されてる話は聞いてましたが……。40数年ご無沙汰している仲間たち！その懐かしさと再会を願って、貴重な本誌紙面をお借りして問い掛けてみたくなりました。

「皆！元気なおじいさんで楽しんでるかい？」



大学時代櫛寮前にて愛車「パブリカ」  
（八代、丸山、土田）



KEYAKI46 2011年櫛寮前にて  
（佐藤、土田、丸山、八代）

## 5. 「昭和43年度農学科入学生同級会」の軌跡

鈴木（奥田） 一郎（農 S47）

「昭和43年度農学科入学生の皆様へ」の呼びかけで始まる“同級会開催の案内”は、今年の春で1995年以来十数回を重ねる。

1995年夏の盆が過ぎた8月21日の朝、私は朝刊社会面「埼玉の教諭、柏崎で水死」のコラムに目を引かれた。亡くなられた方の名が同級生と同じであった。私はその方が勤務されていた両神村（現秩父市）教育委員会に問うた。無念！同級生の谷口正行君であった。多くの同級生とは卒業以来音信不通であった。谷口君と同じ作物学研究室出身で千葉県庁に勤めていた鈴木（小澤）一男

君、私と同じ園芸学研究室で埼玉県庁に勤めていた富田廣君にすぐ連絡を取った。手分けして翌日執り行われる谷口君の葬儀の連絡を、関東及び近県に住む同級生諸氏に行った。葬儀には加藤哲郎、肥土邦彦、峰松敏夫、富田の各君と私が参列した。その年の11月15日、千葉県在住の鮎川伸治、井上満、鈴木一男の各君と私は、母校教壇立っていた岡崎正規、松村昭治両君と共に、「“谷口正行君を悼む”同級会」(写真)を、母校そして大国魂神社を会場に開いた。一同して顔を合わせることはおよそ四半世紀なかったので、「この“集い”を機会に、毎年集まろうではないか」との機運が持ち上がった。

「同級会 in ご当地」と言う企画で、同級生が居住する地方での開催も行われた。最初は福島県会津若松市であった。福島県庁に勤める松川裕君の「“会津のそば”はうまいぞ〜」との一声で、“JAふくしま”勤務の石森道雄君の協力も得て開かれた。翌年、長野県小布施町議会議員となった関谷明生君の当選祝いと、“湯の丸高原”麓で和牛黒牛を飼う峯村富治君の牧舎見学を兼ねて“七味温泉”で開かれた。遠く熊本県から常石英作君が駆けつけた。「是非私の住む山梨県北杜市で開催を！」との佐藤(田中)久江君の呼びかけで開かれ、瑞垣山登山をした後、参加した友もいた。「大人の修学旅行」とのことで、京都の社寺と庭園をそれらに造詣の深い肥土君の案内で、京都在住の長誠一郎君の力添えを受けて京都開催も



行った。2011年には多くの同級生が定年を迎えたこともあって、母校を訪ねる機会を設けようと、母校開催を、母校の教壇に立つ、鈴木創三君、松村君の尽力で行った。2011年、2012年は養蚕学科の学友との共同開催となった。2012年からは交通の便の良さを考えて、東京駅付近での日帰り開催を基調とすることにした。同級生諸氏の意向を尊重した①山登り、②古都訪問、③海外庭園巡りなどの企画、実践を志向しようという話も出た。これを受けて2012年末には「福島復興支援りんご買出しツアー」を行い好評を得た。

今年の賀状で峰崎康裕君が「『北海道で同級会を』とのこと、気に留めている」、野村敏夫君が「同級会予定日の連絡を二ヶ月前に」と記してあった。同級会開催への要望は、“老いて(置いて?)けぼり”にされないようにとの、同級生諸氏の意気込みと私は思っている。

## II-2 サークルの絆

### 1. 東京支部と「けやきクラブ」

馬場 信行 (林 S35)  
渡辺 彰 (農工 S43)

農工通信を見ていると、各支部や部会の年次総会、クラス会や同期会などの行事が写真入りで報告されています。

<幹事のコメント>からは、同県人や懐かしいメンバーが集まった楽しい様子や参加メンバーを増やすための幹事さんの工夫も読み取れます。その他、研究室やクラブ活動を中心にした集い、そして不定期に有志が集まるクラス会など、様々な同窓生の集いが開かれていると思います。

「けやきクラブ」は、「常設の同窓会サロン」と言うと少し大袈裟ですが、東京への出張などがあった時に、都合がつけば顔を出してみようというのもよいのではないのでしょうか。そのような思いから、「けやきクラブ」は東京支部を母体にして毎月開催され、皆様の参加をお待ちしています。

現代が高度技術社会となり、ましてや農工大は「農」と「工」という理科系なので、集まっても話が硬くなりがちです。時々、女性の参加がありますが、その時の会は、技術論的な話とはジャンルの異なる美術とか音楽とかファッションなどに話題が拡がり、和やかに、優しく、明るく、賑やかになります。そういう意味で、「けやきクラブ」では同窓会支部や学部の枠を超えた卒業生、現役の学生・院生、教員・職員などの農工大関係者はどなたでも、また、友人同伴も大歓迎です。

### 「けやきクラブ」開催の決まり

開催日時：毎月第3火曜の6:00 p.m.~8:00 p.m. (祭日の場合は翌水曜日) 開催場所：JR新宿駅・東口。旧三越(現ビックロビル)の向かいのライオンビルB1Fライオンビヤホール。

上記のように、決まった日の決まった時間に、決まった場所で、自由なおしゃべり会を開いています。女性の卒業生で、お一人での参加は気がひけるということであれば、中学、高校時代の同級生とご一緒におしゃべりに来られても、また、楽しいのではないかと思います。

全国の皆さん、東京へ来られた時は遠慮せず



寄って下さい。突然でも大いに結構です。会費はワリカン制ですので、お一人3,000円~4,000円で、現役の学生・院生諸君と女性の場合は割引になります。飲まれない方は、好きなお料理を召しあがって下さい。

[akrw14442@jcom.home.ne.jp](mailto:akrw14442@jcom.home.ne.jp) (渡辺)

## 2. ワンダーホーゲル(WV)部 OB会の山荘(大田市木崎湖畔の “漂白山荘”)について

伊王野 耕二(工化 S39)

昭和58年9月10日、長野県大田市木崎湖の湖畔の山荘にWV部顧問の川村亮教授(名誉教授)はじめとして、OB14名、学生3名、OBの子供2人が集まり、山荘の落成式が行われた。

WV部第一期生が卒業したのが昭和39年。丁度、日本の高度成長時代が始まった時で、皆は仕事に追われ機械の一歯車のごとくの毎日でした。しかし、東京近辺勤務の仲間達がしばしば新宿で集まったり、川村先生のご自宅を訪問したりしていました。そんな中でWV部OB会のシンボルとして「山小屋を建てよう」という話が出た。

早速、川村先生に相談したところ、先ず土地購入資金を集めること。土地は、色々な所を知って

いるので紹介出来る。資金の目途がついた時点で絞ったら良いだろうという事になり、昭和43年3月の集会で私が「山小屋建設委員長」に指名され、各卒業年度の中から一人ずつ委員を選び、委員が各自の同期を纏め資金集めをするという委員会を作った。

この時から本格的な資金集めが始まったが、当時のOBの人数（50人）では全く無理、将来のOB（現役の学生、これから大学へ入学してWV部員になる人達）頼みの長期戦の計画だった。

昭和43年11月に下北沢の川村先生のご自宅で、木崎湖畔の土地所有者（降旗氏）と土地の契約を交わした（1坪3,000円、土地100坪購入）。但し、その時は全額ではなく半額弱、残りは後日でOKという了解を頂いた。“川村先生の信用”で降旗氏は了解してくれた。

昭和52年（1977年）8月27日、28日に木崎湖畔でWV部創立15周年記念祭を行った。川村先生はじめ、学生、OB、30数名が参加し、OB会の活動の主目標に「早急に山荘を建設する」事を決議した。

資金集めのために、不定期であるが、OB会ニュースの発行、及びOB会の機関誌（漂白）の発行を行いPRに努めた。昭和54年（1979年）2月の漂白第4号“山小屋特集”に山荘の図面、完成予想写真を載せて、皆の関心を引く努力など行なった。

昭和58年（1983年）5月の連休にOB14人【若手OBは白馬の残雪スキーの帰り】が木崎湖畔の旅館“だるまやさん”に集まり、大町市役所の確認、ご隠居さんとの打ち合わせをし、その結果、小屋の建坪12.5坪、小屋の中に4.5坪の中二階を付ける事になった。建築作業は学生達の夏季休暇を利用して手伝うという予定だったが、市からの建築許可が遅れてしまい、学生は合宿に入り、又OBは会社勤めがあり結局、だるまやさんのご隠居さんと地元の大工さんをお願いした。

目的は達成されたが、時代の流れも変化し、OB達の生活も変化してきた。短い休暇を使用し、不便な山小屋は敬遠されるようになってきた。行けば、先ず部屋掃除、食事は自炊、子供達は興味津々だが、奥さんたちは拒絶反応。徐々に使用頻度も減少傾向。それで、この物件を母校、または母校同窓会に寄付しようということで、早速申し入れした。大学からは早速、現地を見学したいというお話があり、職員3人をご案内した。しかし、学生の合宿研修施設としては小さすぎる、ということで、梶井学長（当時）から丁寧なお断りの書類をいただきました。その後、大町市在住の不動産業者から将来大開発をするので、購入したいという依頼が来た。

初めはお断りをしていましたが、今後の維持管理、治安の面から考えて、良いタイミングと判断して、平成18年秋のOB会総会で売却することに決定。売却して得たお金を出資者へ返却するという意見も出たが、全てをWV部及びOBの活動に使用することにした。

母校のWV部は今も続いている。しかし、OB達の努力を知る者が少なくなり記憶から消え去る日が来ると思う。この度、原稿執筆お願いをいただき、駄文を呈するのは恥ずかしい思いですが、後輩達に「目標は必ず達成される」と言うことを実証するために寄稿いたしました。又、記念



WV部OB会の漂白山荘

(?)の証拠になる山荘の“看板”は自宅に保存しています。

川村教授は平成12年4月4日逝去されました。その間、工学部、農学部に係りなくWV部OB達に大学の勉学では得られない、貴重な事を教えて下さいました。

“漂白第8号は”川村先生を偲んで……“を特集【写真入り、B5版127ページ】しました。今も先生には感謝してご命日前後に近辺のOBに声を掛け合って墓参しています。

### 3. 史跡探訪会OB会の活動

水谷 朝己 (製糸 S47)

東京農工大学史跡探訪会は昭和41年、42年学部入学の方々により設立されました。現在はOB会として、昭和41年から45年入学の皆様と四季折々の風情を楽しみながら東京近辺で集まっています。そのイベントは新年会、観梅会、暑気払い、紅葉狩り、忘年会等の名目で約3ヶ月に一度の間隔で、鑑賞会、見学会、懇親会を行っています。また、数年に一度は遠方へ足を伸ばし、京都やその他の地方へ行くこともあります。

先輩諸氏のお話によると、在学中の活動は史跡探訪といっても、史跡や旧跡をテーマに活動しても的を絞れず散漫な活動になってしまい、模索している中で日本庭園をテーマに活動することになったそうです。真夏でも真冬でも只管歩き、京都、滋賀、山梨、静岡の名刹を巡ったものでした。農工大という理工系の大学では珍しく仏教美術・芸術や歴史に傾倒していました。

特筆すべきは、本学の大先輩である竹山祐太郎氏が静岡県知事をされており、東名高速道路が

完成した時期に、静岡県三ヶ日町の摩訶耶寺という真言宗の寺院に庭園が発見され、日本庭園研究会主導の発掘・庭園整備作業（この成果は『摩訶耶寺庭園学術調査報告書（1969年・日本庭園研究会）』にまとめられた）に有志が参加し、これが大きく日本庭園にのめり込むきっかけになりました。

現在でも時折京都の庭園巡りを行い、数年に一度山梨県や静岡県での鑑賞会、年数回は東京近郊の庭園・美術館の鑑賞会を行っています。山梨県では甲州市臨濟宗向嶽寺、武田信玄で有名な慧林寺、甲府市東光寺、都内では六義園、湯島天神、清澄庭園、向島百花園、小石川後楽園、浜離宮、旧芝離宮、旧古河庭園、皇居東御苑等々です。

印象深かったのは8年前の正月に京都を訪れ、庭園鑑賞のあとOB会員の紹介で祇園のお茶屋で芸妓・舞妓さんを招き、普段の個人では体験できない世界を垣間見たことでした（写真）。ある意味では日本庭園は悠久の存在ですが、舞妓さんは芸妓になるまでの一時の存在ではあります。とはいうものの、その一時に全員のほせ上がりしました。寿々葉さんとおっしゃる舞妓さんでJR東海のCMにも出演されました。これは何と言っても（岩崎峰子著「祇園の教訓」にも紹介されているように）連綿と続く日本文化であり、許されるならばこういう機会も何度か欲しいものです。



卒業後、大きく時間が経過すると共に、鬼籍に入る方も何名かいらっしゃることは大変残念です

が、老境に差し掛かった私達はその方々の分まで謳歌しています。亡くなった方の感性は40年以上経過した現在でも私達の記憶の中に生きており、あの方だったらこの情景をこう表現したかも知れないと思うこともあります。あの頃と同様に、近々山梨県での合宿を再演する予定です。

## 4. クラブ活動が人生の糧

菅野 茂樹 (織高 S49)

工学部繊維高分子工学科を卒業したのはオイルショックの真ただ中でした。理科系という事で大手繊維卸商社の情報システム部門に配属、社内システムのオンライン化に向けプログラマーとしてIT人生がスタートしました。当時はPCも携帯電話もコンビニもない時代です。

その後、SE、社内コンサルとして、人事給与、物流管理、財務管理、顧客管理、輸出入システム、展示会システム、倉庫物流システム、バーコードシステム等、様々なシステムの設計・開発から運用・保守までを経験しました。

1998年に人生の転機がきます。業績不振の会社が希望退職を募り、それを機に独立し、公共金融システムの再構築プロジェクトに参画。その後、外資系IT会社に常駐し、ERPパッケージのプリセールス、コンサルティング活動で製造業などの人事・給与、会計等を担当しERP関係に転ずる事になります。またERPをきっかけに大手システム会社に正社員として入社し、ERP導入プロジェクトにPMやPLの立場で参画しました。

2004年に独立系システム会社へ転職し、ERP事業を任せられ、O社データベースの事業拡大を推進したり、ERP技術者の新人・中途採用・教育など

を手掛け、更に数々のERP導入プロジェクトの要件定義からカットオーバーまで推進しました。また、公共案件への入札提案等も行いました。

2010年11月に定年退職。IT会社を起業しこれからと言う時に、あの東日本大震災です。

一方、農工大では軽音楽部に入り、当時一世を風靡していたフォークグループ「五つの赤い風船」のコピーバンドをやっていました。「五つの赤い風船」は1972年に解散し、我バンドも就職と共に自然解散してしまいました。

時が経ち2000年50才に音楽人生の転機が来ます。「五つの赤い風船」再結成と共に、再びバンドをやろうとのお誘いがあったのです。丁度私も転職後のタイミングでバンド活動をやりたいと思っていた矢先でした。それからは怒涛の様に、「五つの赤い風船」等日本のフォークだけでなく、PPM、ブラフォー、キングストントリオ等と学生時代からバンド活動している他校のメンバーとも交友関係が広まり、気が付くと親父バンドの真ただ中です。農工大時代のクラブ活動がこれほど、定年後の人生の糧になるとは思ってもいませんでした。

同じ時代に音楽を愛し、悩みそして希望を持った仲間と、80才までバンドを続けていたら紅白歌合戦に出られるのではないかと冗談を言っています。もしかしたら、私は東京農工大学軽音楽部フォークソング学科卒業かもしれません。

s-sugeno@alfanet.in



一層輝く親父バンド

## 5. 「青鷹（あおたか）の会」発足の顛末

向後 晋一（織高 S52）

いきなり「青鷹の会」と言われても一体何のことやら、読者諸兄には困惑を隠せないことと思います。そこで順を追って発足の顛末をお話します。

筆者は工学部繊維高分子工学科（当時）を1977年に卒業し、特許庁に採用されました。在職中、2004～2006年の三年間にわたり工学部で「特許法」を講義する機会に恵まれました。お世話になった母校に恩返しをするつもりで講義を引き受けましたが、ある学生に「お金が欲しくてやっているのか」と尋ねられたときには正直絶句しました。学生のあまりの無邪気さ加減に呆れましたが、その刹那に、学生の頃の我が身の不徳を思い出しました。

あれは大学2年の春、「量子力学」の輪読を思い立ち、仲間を募り、教養の物理化学の先生に無理をお願いして勉強会を立ち上げたものの、自らの限界に嫌気がさし、途中で放り出してしまったのでした。そのとき先生は筆者をどう思ったでしょう。さて、件の学生は、筆者の講義が終わりに近づいた頃、自らの非礼を詫びに来ました。

その後、長年勤めた特許庁を2008年に退職して、次に就いたのが、特許関係の調査を主たる業務とする（財）工業所有権協力センター（略称は「IPCC」、**「気候変動に関する国際パネル」**とは別）の調査業務指導者でした。IPCCは全職員数約1,600名（2013年4月現在）のうち約1,450名が調査業務実施者と呼ばれる技術屋集団で占められる組織です。彼らはあらゆる産業分野をカバーする特許調査の専門家であり、前職では企業や研究所などで技術開発や研究などに従事しており、管理職経験者が多数を占めます。年齢も30代から70



青鷹の集まり

代まで広範に渡っており（平均は62歳）、勿論、女性も少数ながら存在感を示しています。と言うわけで、彼らの出身大学も全国に及んでいるはずであり、筆者はかねてより農工大出身者も少なからず、いるのではないかと睨んでいました。

ところでIPCCでは余暇のサークル活動が非常に盛んです。筆者も健歩会（歩こう会）と、山楽会（ワンダーフォーゲル部のようなもの）、それに写真部の三つのサークルに入っています。同じように出身校毎の同窓会も賑やかに行われており、例えば、北大、群馬大、上智大、広島大等々がIPCC内で同窓会を組織しています。そうであれば農工大の同窓会を立ち上げない手はないと思いつき、同窓を募って第一回IPCC内農工大同窓会を平成25年4月10日（水）に開催しました。参加した15名の内訳は、工学部出身が13名、農学部が2名、卒業年次はS43年～S61年に14名、その他H13年ベースの博士課程修了者が1名でした。当日は学生時代にタイムスリップして、大いに飲んで語って楽しみました。

最後に、「青鷹の会」の呼称は、農工大の校歌の一節にある「青鷹」に因んだものです。命名者はグリークラブのOB。すでに禿鷹の会が相応しい我々ですが、青い好奇心を持ち続けて今後も末永く活動していきたいと思えます。

## 6. 時の流れ = 節目の三話 =

古賀 淳士 (農院 S54)

はじめまして、今春から長崎県支部の連絡員を務めます古賀と申します。前支部長からの「投稿指令！」により初めて筆を執らせていただきます。

### ◇時の流れ・その1

= 同窓会県支部23年目の支部長交代 =

平成2年度から本県支部長を務められた本多正二(製糸S32)先輩がこのたび会長職を勇退されました。この間、当地では雲仙普賢岳噴火災害、世間では週休二日制の開始など様々な出来事がありました。23年の長きにわたりお世話になりました。今年度からは、これまで長年にわたり連絡員として支部総会開催へ向けた連絡調整のお世話役を務められた、片岡正登(製糸S48)先輩が支部長を引き継がれます。これからも宜しく願いいたします。

### ◇時の流れ・その2

= 入庁34年目の長崎和牛・日本一! =

5年に一度の全国和牛能力共進会(和牛のオリンピック)が昨年秋に本県のハウステンボスをメイン会場として開催され、口蹄疫を乗り越えて種牛の部で名誉賞(総理大臣賞)を獲得された宮崎県と並んで、我が長崎県が肉牛の部で名誉賞を獲得し「長崎和牛」が日本一!に輝きました。

34年前に県職員(畜産職)として採用された私の新任地は、平戸種畜場という県有種雄牛の改良増殖を業務とする職場でした。また、今大会で肉牛部門日本一に輝いた出品者の中には私が農業改良普及員(畜産担当)として勤務していた頃に、国庫補助事業で共同肥育牛舎をお世話した和牛肥育農家も入っており、任期満了まで残り2年の私には感慨深い大会となりました。

◇時の流れ・その3 = 畜産学研究室60年目の記念祝賀会と記念誌出版 =

学生時代は府中キャンパスで当時新築間もない6号館の1階、農学科・畜産学研究室に在籍し、昭和50年4月から4年間、森田琢磨教授と鎌田寿彦助手にお世話になりました。

その畜産学研究室が今年めでたく還暦を迎えます。これを記念して今年秋に大国魂神社で祝賀会を開催し記念誌を作成するという連絡が届きました。

十年前にも50周年祝賀会と記念誌「色の黒い奴」を畜産学教室同窓会から刊行した経験を踏まえて、今回は実行委員会会長の南波利昭(S46)先輩を中心に取組まれます。



平成25年3月9日 長崎県支部総会

## 7. 緩やかな関係

柳田 開 (農 S57)

大学では、農学科の畜産研究室に在籍していたものの、勉強に熱心な学生ではなくお酒を飲んだ後に湿った布団で寝ていた6号館1階の当直室や空手道部の練習に汗を流した記憶の方が勝っています。

この農学科を1982年3月に卒業して30年近い2011年の12月、78年に入部した空手道部の同期生と同窓会を催しました(写真)。

当時副主将だった森島隆之氏と相談し、連絡がつくまでに時間がかかるだろうということで、約1年前から準備を始めました。森島氏が同窓会名簿を頼りに連絡をとると、意に反して「あつという間に所在がわかった」ということです。卒業後もそれぞれ付き合いがあり、途中で退部した者や他大学に転校した者まで連絡がつきました。

海外勤務など仕事の関係で無理な者や介護で時間がとれないという者もいましたが、市村和寿主将以下、沖本幸也、坂下昭洋、田中利明、八須理明、藤本朗の各氏を加えた計8人が参加することになりました。

会場となった東京駅八重洲口から徒歩数分の宴会場に早く着いたので、入り口にある喫煙所で一服していると、面影のある顔がいくつか通り過ぎていきます。相手はチラッとこちらを見るのですが、気づいていない様子。30年の歳月で浦島太郎の気分を味わいました。

しかし、飲み始めると、当時のエピソードに近況報告と話題は尽きず、瞬く間に時間が過ぎました。飲み会での各人の役割も当時のままで、現在の職業を聞くと、多種多様ではあるものの、その人らしい職業に就いていることに驚かされました。



最後に「武蔵野煙ぶる」で始まる部歌を合唱したところ、当時はあれだけ歌っていたのに、うろ

覚えになっていました。歌詞をプリントしていたので、何とか歌える状態です。最後の「我が青春に悔いはなし」を歌っていると、市村主将が「そう言えば肩を組んで歌ったな」と言い出し、50過ぎのおじさんが肩を組んで何度も連呼しました。顔は老け、学生服は着ていませんが、これもまた当時の状況を思い出しました。

大学を卒業後、フリーターとして4年余りを過ごし、現在勤務している日刊建設通信新聞社に入社しました。これまで、農工大卒の人と直接お会いすることはありませんでしたが、偶然にも同窓会出席者の一人が設備工事会社に勤務していました。

2011年に再開した農工大福岡県支部総会では、建設コンサルタント会社で働く後輩がいました。また、空手道部の先輩や後輩も多数いました。2年後の13年に開いた福岡県支部総会では、農学科の同級生だった千年篤教授から農工大や同級生の近況を聞くことができました。

建設関係の新聞社という畑違いのところもあり、農工大とのつながりは疎遠になりがちですが、このような緩やかな関係も良いものだと思われ、改めて気づかされます。これからも、この農工大との心地良い関係を続けていきたいと思えます。

### II-3 忘れ得ぬ農工大

#### 1. はるかなる青春の駒場寮

太田 道明 (農工 S42)

歴史ある自治寮（駒場寮）で過ごせた4年間は、まさに青春そのものだった。

この寮はかつての馬小屋を改良したもので、ど

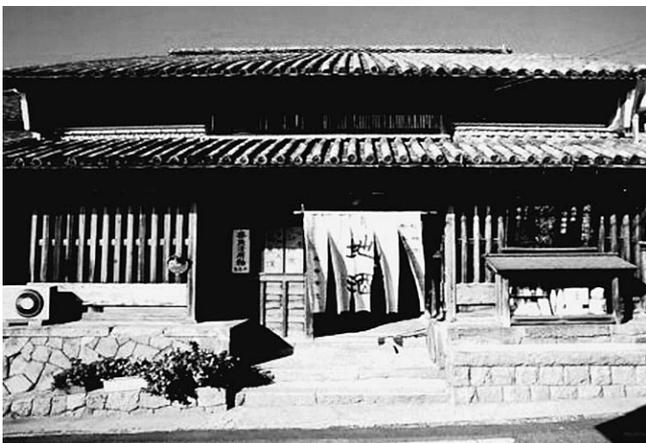
う見ても快適な生活ができるような建物ではなかったが、まだ武蔵野の雰囲気が残っている静かすぎるような環境のもと、勉学には最高の立地条件であった。が、私もここで一生懸命勉強しておれば人生が変わっていたかも知れないと今になって思った。

昭和38年4月の入寮時、大阪から母と2人でこれから生活をする寮の4人部屋を見てびっくりした。外見もさることながら、実に殺風景で寒々とした部屋で果して4年間も生活できるかなと思ったが“慣れ”というものはおそろしいもので1ヶ月も経てば慣れてしまった。寮費（部屋代？）が百円、食事は2食付きで確か月2800円と普通では考えられないような安価で、これはまさにありがたい以外の何物でもなかった。

入寮後先輩達から歓迎会だと言って夜遅くまで酒を飲んだが、皆さんの強いこと強いこと、私は勧められるまま、断ることもせず夜中まで飲んで翌日以降、2日酔ではなく3日酔、4日酔で寝たきりの状況で授業に出られないので、伝え聞いた通学生が心配して見舞いに来てくれたことを憶えている。後で先輩に聞くと4人で1升ビン（合成酒）3本、ビール20本を空にしたそうだ。生れて始めて飲んだ酒であったが、よくぞ病院に運ばれなかったことだと思った。それから4年、酒だけ

は大概強くなり、これが将来にも影響した。寮には北は北海道から南は沖縄まで全国から集まった200人近い寮生の中には、酒の強い人、全く下戸の人など様々な人がいたが、卒業時にはなべて酒に強くなったように思う。また、寮は方言の宝庫であった。4年間で同室になった人の出身県の内訳は、鹿児島、熊本、福岡、山口、広島、愛知、長野、千葉、宮城の各県で、1年間だけの人も4年間一緒の人もいた。同じ県の人と話をするため部屋にきてお国言葉で普段話をしている内容は他には全くわからない時もあり、気になることもあったが、本人達にとっては良い息抜きだったようだ。また寮はクラブ活動のための拠点でもあった。大学本館の隣ではほぼ構内の中央に位置している駒場寮は24時間出入り自由で最高の休憩場所でもあった。殆んどの寮生がクラブ活動に集中できる環境にあったと言える。このような思い出多い駒場寮も老朽化のため、私が卒業して数年後に廃寮となり小金井に新寮が建った。

卒業して実に48年が経った。67歳までサラリーマン生活を続け、その後家業の太田酒造を継いだ。今は安全で安心して食べられる良い製品づくりを目指している。駒場寮の建物も古かったが、太田酒造の建物はもっと古く江戸時代からで、国の有形文化財となっており、私はテレビ取材や見学者への説明役としても結構忙しくしている。



有形文化財の太田酒造

## 2. 東京競馬場のおかげで 農工大に入学できました

平茂 寛（佐藤 和久）（農 S54）

私は、昭和54年3月に農学部農学科を卒業し、岡山県に入庁した。公務員生活の傍ら、一昨年3

月に平茂寛（ひらしげ かん）のペンネームで小説家デビューした。

このペンネームは黒毛和牛の名前に由来している。畜産の普及指導員だった時によく訪問した和牛農家で、寛平茂（ゆたかひらしげ）という雄牛が飼育されていた。この牛の名を借用し、人名らしく順を入れ替えたのである。

畜産関係の仕事に進んだ所以は、農工大への入学に他ならない。そこで、私的な内容で恐縮だが、大学入学に至る経過を書き綴ってみた。

私の父は、自らの戒名を「馬輪院単複連勝居士」と決めていたほどのギャンブル好きだった。幼い頃は、母親とともに、競馬場や競輪場によく連れて行かれたものだ。

知らぬ間に父に感化されていた私は、早期から競馬にのめり込んだ。

静岡市内の高校に入学した頃には、自宅のみならず、教室まで専門誌を持ち込み、馬券検討するようになっていた。担任からは「最近の調子はどうだ」などと、よく声を掛けられた。私の競馬好きは校内で有名で、なぜか公認されていた。

忘れられない思い出がある。

高校二年の夏、我が校の野球部は地方大会の準決勝まで進み、甲子園初出場の期待を集めていた。

ところが、選手ならずとも緊張の高まる中、野球部のエースは、こともあろうに準決勝当日に発走するレースの馬券購入を私に頼んできたのだ。なんと能天気！

結果は推して知るべしだ。愛すべきエースは滅多打ち。大願は露と消えた。

ところで二年生は進路を定める時期でもあった。

父は、「親の膺はできるだけ齧る。だが、子供には早く働かせる」主義で、私を競馬新聞の記者にするつもりだった。扶養からの解放と馬券戦略データの収集力強化とを一石二鳥で狙ったのである。

一方、私は働くのが嫌だったので、降りかかる

苦難から逃れる道を模索していた。

その年の晩秋。底冷えのする東京競馬場で、父は、競馬新聞売りの中年女性に声を掛けた。

「高卒の息子を競馬新聞記者にしたいんだ。つてを教えてくれないか」、すると、女性は思いもよらぬ助け船を出してくれた。「今頃は競馬新聞も大学出てなきゃだめだべ」

私の頭の中に電撃が走った。地元に戻るや、東京競馬場に最も近い大学を探した。

あったあった！農工大が。競馬場近くの大学に入学すれば、下宿もまた競馬場に近い。これぞ競馬遠征の前線基地ではないか——私は勝負を賭けて、父を口説いた。それが見事に嵌った。あれほど頑なに就職路線を譲らなかつた父が、舌嘗ずりをして頷いたのだ。以後の人生の流れが決まった瞬間だった。

在学中は、新聞売りや場内清掃など、競馬場が専らのアルバイトの場だった。人生の縮図が露わとなる場所で、様々な人間模様を見た経験が、小説執筆で大いに役立っている。

在学中は素晴らしい環境の中で楽しく学び、遊んだ。

今、どの時代に戻りたいかと問われれば、なんの迷いもなく農工大の時代に戻りたいと答えるだろう。



東京競馬場のスタンド— 現在も感謝の気持ちを忘れず、毎週、お金を納めている

### 3. 10年かけて、「伝えること」を学びました

戸金 悠 (連農 H24)

私は2002年に入学し、博士課程を修了するまでの10年間、農工大にお世話になりました。実に多くの仲間を支えられ、様々なことを学んだ学生生活でしたが、その中でも特に大きな財産だと思っていることがあります。それは様々な人と触れ、対話をしたことです。立場や世代、価値観の異なる人々とコミュニケーションをとり、その結果、「伝えること」の大切さと難しさに気が付きました。その「気づき」が私の血肉となっています。それを実感した体験について紹介させていただきます。

大学でフットサルを始めたいと思っていた私は、入学直後、新サークルを立ち上げました。体育館やグラウンドを定期的に借りられないか、市役所や付近の小中学校などの大学外部に何度も出向いたのです。すると、親身に相談に乗ってくれる方もある一方、理不尽で独善的な大人と出会い、辟易することもありました。高校や大学とは違う「外」の世界に触れ、様々な価値観と出会ったのです。私は今では初対面の人ともすぐに打ち解けられることが多いですが、それは「価値観が多様である」という当然のことを、しっかりと認識できているからだと思っています。その後、サークルは無事に創設され、運営は軌道に乗りました。しかし、振り返ると「伝えること」には成功していなかったと思います。私たちは「勝つ」よりも「楽しむ」ことを理念とし、サークルを創りました。初期メンバーにはよく浸透していたその理念も、年を経るごとに薄れていき、10年たった今、理念を語るこ

とができ、体現できている後輩は残念ながら、さほど多くないと感じています。「創る」ことには注力しましたが、「伝える」ことへの意識が低かったと今では思っています。

また、私の学生生活を支えた両輪のもう1つが、7年間携わった研究です。その中で「伝える力」を鍛えることができた非常に有意義な体験があります。それは学園祭や中高生向けのサマースクールに参加して行なった研究発表です。自分の研究を場合によっては小学生に伝えるという機会です。子どもをただの聴衆にせず、質問を引き出せるほど興味を持たせることが目標です。どのような言葉を選び、どのようなことに焦点を絞れば興味を持ってくれるのか、準備時に相手を「しっかり想定する」ことが肝だと感じました。専門家が集まる学会発表はどれほど楽なものでしょうか。相手をよく知り、自分自身をよく知ること、「伝える」ために当たり前のことに聞こえますが、とても勉強になった機会でした。

長い学生生活でしたが、私自身はもっともっと外へ飛び出せばよかったと思っています。後輩の学生たちには学生の中に様々な世界に触れてほしいと思います。学科や学部はおろか、大学や国境を越え、「人」との交流を勧めます。多くの文化や人と触れ、「対話」することは必ず将来の財産になると約束します。拙い文章でしたが、最後までお付き合いありがとうございました。



フットサルサークルの合宿

## Ⅲ. 仕事に生きる

### 1. 市議で最後のご奉仕を

殿岡 修 (機械 S39)

私は、昭和39年機械工学科を卒業後、当時の東京電気(株)の技術部に入社して以来、40年間技術畑で、世界を股に、情報収集、新製品開発をしてまいりました。又、最後のご奉公として、中国の工場の立ち上げ責任者を経て、今の(株)東芝テックでのサラリーマンを卒業しました。

その後、東京の商社の役員を経て、洗濯機のメーカーでコインランドリーの新製品の開発のお手伝いをしてまいりました。その間に、少しプライベートな時間が出来ましたので、地元の市民活動に参加をしました。私の出身地で有ります静岡県東部の特例市である沼津市は、バブル時期に計画した「沼津駅周辺総合整備事業」として、鉄道線路を一階8m、二階15mに上げる工事を、2,000億円掛けて、進めようとしておりました。そこで、今この時期にそのような莫大な税金を投ずるべきではないとして、私は市民の反対運動を支援する立場で、参加していったのです。

しかしながら、この運動の中で、市民だけでは思うように進まないとして、市会議員を擁立して、市政を動かす事で解決しようとした所から、私が市会議員として担ぎ出されました。当時、67歳の高齢であり、且つ技術屋で、政治には全く無知である事から、お断りしたのですが、地元からの出場要請が強く、出馬したのが始まりです。現在、二期目の7年目に入っております。

沼津市は、県東部の人口約20万人、駿河湾に面



演説中の筆者

した63キロメートルの海岸線を有し、北には富士の霊峰を戴く、素晴らしい景観の温暖地域であります。物産は、蜜柑、お茶、干物を主要物産とする農業、漁業と東芝機械、藤倉電線、明電舎、富士通等の製造業も盛んな土地柄でありました。

かつては、静岡県の東部拠点都市として栄えた都市でございます。

しかし、近年は、人口は減り続け、主要企業も他市に移り、今年の1月に沼津市唯一の西武も撤退し、中心都市としての機能が果たせない、閑散とした街となってしまいました。市の財政も、一般会計予算の二倍の約1,400億円もの大きな負債を抱える都市となって居るにもかかわらず、東日本の震災も復興道半ばのこの時期、市民の命を護る津波対策に先ず税金を投ずべきなのに、2,000億円もの大金を掛けて、鉄道線路を上げようと躍起になっているのです。その市政に疑問を抱いている市民が多数いる中、私は、市民の代表として、今まで頑張ってきています。しかし、市の執行部と鉄道高架推進の議員達との壁は厚く、色々なアクションを仕掛けているのですが、なかなか

か、成果が出てきません。

しかし、幸いな事に、静岡県知事が前大学学長の学者に代わってから、少し、風向きが変わってきております。現在、県主催の「沼津高架PIプロジェクト」で、鉄道高架事業の見直しも含めて、「沼津駅周辺総合整備事業」を討議する機会、勉強会、車座談議等を行っております。しかし、国政が自民党に変わって、公共事業重視の政策を進めていこうとしていますので、どうなるのか心配な状況も有ります。市民を見方にして、老体を鞭打って、頑張りたいと思っております。

## 2. ホントのようであてにならない話

鈴木 眞雄 (製糸院 S52)

私は樹木医です。平成9年に資格を取得しましたが、浅学非才・力量不足を痛感しており、樹木医としてのスキルアップが欠かせない毎日です。

「工学部OBがなぜ樹木医に？」と不思議に思われると存じますので、若干経過をお話します。

私は32年間、蚕糸職の地方公務員として在職しましたが、初めての配属先は蚕業試験場でした。工学部出身の門外漢に預けられた仕事は、クワの栽培に関する試験研究でした。初めて、桑畑やクワを相手にしましたが、職場の同僚・上司の助言指導のもと、門前の小僧よろしく独学独習の貴重な経験となり、もともと植物好きだったこともあり、充実した8年間を過ごしました。この時の体験が、樹木医の資格にチャレンジしてみたいという気持ちを育んだのです。幸い、前提の「樹木の保護・育成に関する実務経験7年以上」はクリアしていました。

樹木医研修受講生選抜試験に通り、つくば市で2週間の研修を受けました。この時の同期生、講

師の先生には農工大OBもおり、当時の日本樹木医会会長の近藤先輩は陣中見舞に来てくれました。樹木医で活躍されている農工大OBは数多く、有為の人材を輩出している母校はさすがと再認識したことでした。さて、本題に入ります。

山で方角を知りたいときは、切り株の年輪を見よ。年輪間隔の広い方向が南だ。なぜなら、木に陽が当たる側が太るからだ。

霧のたちこめる中、Mさんが山を歩いていたら、道に迷ってしまいました。南にある山小屋に進みたいのですが、あいにく磁石を持ってきていません。近くに切り株があることに気付いたMさんは、「そうだ。年輪を見てみよう。分かった。あっちが南だ。」こうしてしばらく進んでいきましたが、どうも様子がおかしい。やがて、霧が晴れたので木に登り、あたりを見回しました。すると、山小屋は今まで南と思って歩いてきた反対方向に見えるではありませんか。南と思いきや、実は北に向かっていたのです。ようやく山小屋に着いて事なきを得ましたが、あのまま年輪を頼りに歩き続けていたらと思うと、Mさんの冷や汗はなかなか止まりませんでした。

結論 切り株の年輪を見ても方角は分からない。山では程度の差こそあれ、傾斜があります。そこに育つ木は、重力とのバランスをとるため株元を太らせますが、ブナなど広葉樹では斜面の山側を、スギなど針葉樹は谷側を太らせ年輪間隔が広がります（広葉樹は引張りあて材、針葉樹は圧縮あて材を形成します）。つまり、年輪幅が広がる方向は、斜面の向きと広葉樹か針葉樹かで決まるのです。南と限定はできません。

では、平坦地で真っ直ぐに伸びた木ではどうでしょう。枝葉をほぼ四方均等に伸ばした木の年輪幅は、東西南北大きな違いはないので、方角を知ることが困難なのです。

みなさん、山に行くときは、磁石と地図を忘れないでくださいね。

### 3. 伊予生糸を支える有形文化財

池上 正彦 (蚕糸 S52)

四国から九州に向かって伸びる半島の付け根に保内町という小さな港町がある。半島は三崎半島と呼ばれ、太平洋から流れ込む黒潮をはばむように突き出している。保内町は半島の南側にあり、三方は山で囲まれ、海に向かって流れる小さな川沿いに町は広がっている。かつては、櫛（はぜ）や生糸の積出港として栄え、東洋紡績や伊予銀行の発祥の地とは、とても思えない静かな佇まいだ。

港近くの旧道を行くと、明治の面影を残した白い洋館が少し奥まって建っている。明治17年から蚕種の製造を営み、いまも操業を続けている（株）愛媛蚕種の建物である。玄関を入ると広い石畳の土間があり、中庭に通じる道の横には木造の事務所が建っている。黒光りした上り框（あがりかまち）をあがると、奥の部屋には先代の愛した黒く重厚な金庫があり、手前の部屋には社長の兵頭眞通氏が穏やかに座っている。養蚕学科の一年先輩になる農工大の同窓生である。

事務所から陽のあたる中庭を見ると、両側には木造三階建の蚕舎が裏山に向かって連なり、奥まったところには山の斜面を掘り込んだ冷蔵室が作られている。「やあ、久しぶり」と声をかけると、驚いた風に「おお！ どうした」。

この二十年ほど繰り返されている挨拶である。「カイコ、見ていくか？」というので、中庭に面した木の階段を軋ませながら登っていくと、二階には廊下に面して蚕室が幾つも並んでいる。廊下が意外に明るいのには、分厚いゆがみのある窓ガラスのせいだろう。蚕室に入ると棚に差し込まれた蚕座が並び、明らかに普通とは違う蚕が桑を食べている。伊予生糸を支える細織度の蚕品種である。

日本の養蚕や製糸業は、政策転換のあおりを受

けて平成6年から9年にかけて壊滅したが、幸い、伊予生糸は伝統を活かして、今も生き残っている。

兵頭氏はそれを支える一人である。伊予生糸は、塩蔵（えんぞう）した繭から極細の繭糸を機械で緩やかに繰って作るが、ここではその極細用の蚕品種を製造している。

また、本人はあまり話さないが、東レ（株）との蚕を使った猫インターフェロンの製造やゆうパックによる蚕の学習教材などにも、かなりの実績があるらしい。

漆喰塗りの白い洋館は、明治の蚕糸業の面影を伝える国の有形文化財になり、住人は時代の流れとは別世界に生きているかのようであるが、案外、新規性を好む一面も持っているようだ。「じゃあ、また」。「おお、もう帰るの？」またこれも、いつもと同じである。



(株)愛媛蚕種の中庭

## 4. これから

福澤 徳穂 (植防 S55)

「農工通信」80号に掲載していただいた時の「環境活動部」の生徒が、この春卒業しました。「環境活動」という言葉が、数年の間に、なかなかポピュラーになってきたと感じます。この3年間にいろいろなことがありました。

「環境活動部」の生徒を連れて、いろいろなイベントに参加したことから、横浜市教育委員会の「環境教育実践推進校」に指定されて、充実した活動ができたと思います。

本校の学校林の中は、先輩たちと 생각이詰まった野外炊事の設備とベンチとテーブルが整備されています。テーブルとベンチは30年も経ってボロボロでした。そこで、「神奈川県産ヒノキの合板」を環境教育の費用で購入し、部員の中学生の手で、補修しました。剪定や間伐した材から炭を作っている鎌倉の園芸会社から炭を購入して、学年で野外炊事をし、雑木林の学習をしたりしました。森林インストラクターをお呼びし、学区の老人会の方をお招きして観察会を楽しみました。

そして、財団法人かながわトラスみどり財団から「学校関係緑化コンクール学校林等活動の部」の紹介がありました。軽い気持ちで1年間の活動を報

告。なんと、全日本の国土緑化推進機構理事長賞を受賞し、山口県で開催された「全国植樹祭2012」に招待されたのです。こんなほんの小さな活動で、こんなビッグイベントに。夢のような1日でした。

「全国植樹祭2012」は、山口市の阿知須きらら浜という都会での植樹祭でした。この小さな活動が認められた横浜市立芹が谷中学校の学校林も、都会の真ん中に残された貴重な雑木林です。

植樹する苗木を、街の家庭や教育機関で育て、一般市民が植樹するというイベントもとても興味深いものでした。どんぐりから育てるといふ息の長いイベントにも感心させられました。

山口県は山林面積が広いというお話でしたが、街中でもできる植樹、街に緑を取り戻す活動を教えてくれたような気がしました。

教諭の立場では同じ学校に長い間いることができません。芹が谷中学校に転勤したわたしの目の前にあった芹が谷中学校の学校林は、わたしにたくさんものをくれたと思います。都会に緑を取り戻すためには何が必要なのか。実際に生徒を指導しながら体験し、考え、勉強する機会を得ることができ、本当に充実した6年間であったと思います。

いまは、この活動を細々であろうとも引き継いでもらうためにはどうすればよいかということに頑張っています。(2012年8月投稿)



全国植樹祭2012会場にて

## 5. 土佐の「いごっそう」

豊田 陽一 (蚕糸 S57)

私の大学生活は、クラスやサークルの仲間と飲めや歌えやの日々であり、卒業後も研究生で残るはめとなっていた。そして研究生2年目に受けた就職試験のうち、最後に受けた高知県蚕業職の臨時募集によりやく受かり、それから高知県で暮ら

すこととなった。

県に入庁後の10年間は蚕業の仕事に従事したが、養蚕の衰退に伴い、その後は畜産や農業の部署で過ごしている。高知県で農業関係に従事しながら過ごしてきた。高知の産物に土佐人氣質というものを感じてきた。高知の農業というと促成栽培を中心とした園芸の占める割合が大きく、県農業産出額の約6割は野菜である。ナス、シシトウ、ニラ、ショウガ、ミョウガ等は生産量日本一。このような生産量を誇る野菜などは生産者が一丸となって生産しているわけではあるが、その反面、土佐人は個々のこだわりが強く、無意識のうちにとまるところを良しとしないと思われる面がある。そのためか生産量の限られた特色のある産物があるのではと感じる。このことは、生業以外のことでも強く感じる。

果樹では、土佐文旦が高知特産のかんきつとして知られているが、高知ならではの文旦として水晶文旦がある。この文旦は、室戸市の篤農家が昭和27年頃育成した品種で、寒さに弱いため高知でもハウス栽培でないと生産は難しい。果肉が水晶の様に美しいことから水晶文旦と名付けられたようであるが、土佐文旦より糖度が高く果汁が多くみずみずしく、とても美味しい。しかし、とまった産地といえるところはなく、生産者は県下あちこちにちらばっていて限られている。栽培が難しいためかもしれないが、まとまって生産するという気配はない。

畜産では、高知では和牛はあか牛（褐毛和種高知系）が飼育されている。全国で和牛といえど97%近くが黒毛和種であるが、畜産生産額が全国のおよそ0.3%しかない畜産弱小県であるにもかかわらず、高知県ではこのあか牛にこだわってきた。このあか牛、明治期に韓国から導入され、その後県内で改良され独自の和牛品種となったものである。同じ褐毛品種に熊本系があるが、こちら

は熊本県以外でも飼育しているところはある全国で約2万頭いる。高知系は鼻が黒く、雄は目の周囲も黒く、このことを土佐人は「目黒鼻黒（めぐろはなぐろ）」とって尊び、この特徴が出ない個体は淘汰していったようである。ちなみに熊本系は黒くなく肌色様（熊本系は熊本で独自の改良がなされてきたわけであるが、これは肥後もっこの影響？）である。これも土佐人のこだわりといわれている。しかし、県内でも黒毛和種に押される形で年々飼養頭数は減少し、今や2,000頭程の幻の和牛になってきている。このあか牛、黒毛和種の様な脂肪交雑（霜降り）が入らないため、価格面で不利であるからである。しかし、最近赤身肉の美味しさがようやく見直され始めたのを契機に、昨年「とさあか牛」の名で地域団体商標を取得し、県や関係者もなんとか増頭をと、頭を悩ましながらこだわりつづけている。

他に、高知ならではのものとして、特別天然記念物の土佐の尾長鳥がいる。この鶏は、一生尾羽が抜けないうえ伸び続けるのであるが、このような鶏の育種に入れ込むというのも土佐人ならではと思ってしまう。ちなみに主たる日本鶏は34種といわれているが、このうち8種が高知県原産である。鶏の品種作りにおいても土佐人は相当のこだわりと情熱をもっていたのである。他に、土佐錦魚（とさきん）という優雅な尾びれをもつ金魚があるが、これもまた土佐人が作出した傑作である。

このほかにも特色ある高知県産のものはまだまだあるのだが、これらは土佐人氣質である “いごっそう（異骨相）” と大きく関係していると思う。“いごっそう”とは、「融通の利かない頑固者」ということで、良い意味では、「自分の考えを持ち、安易に妥協しない人」、悪い意味では、「自分の考えに凝り固まり、聞く耳を持たない人」ということになる。この良い意味と悪い意味は、まさに表裏一体といった感があり、良きにつ

け、悪しきにつけ、土佐人が「いごっそう」であるため、他にない品種が育成され、残されてきたのだと思う。今後、それらが大きな価値を生むのではないかとひそかに期待している。

高齢化や過疎化の進行で、高知県など地方の活力低下が叫ばれて久しいが、地域の自然や文化と産物を守ることに、少しでも頑固に貢献できればと思うこの頃である。

## 6. 『温泉宿のあるじ』

箕浦 章浩 (環・資院 H8)

私はいま、温泉宿のあるじです。

岐阜県の奥飛騨温泉郷で、たった6室の小さな温泉宿を、夫婦2人で営んでいます。

農工大を卒業後、専門分野で仕事をしていましたが、縁あってこの地に根を張り、今に至ります。

農工大で『農学部環境・自然学科森林科学専攻』通称『林科』で砂防工学研究室に籍を置いていた私。会社勤務時代は、技術屋として毎日図面とPCに向かい、次々と直面する数々の難問に、自分の不勉強さを呪ったものでした。

ある日、そんな生活から、接客業という全く違う世界に飛び込みました。戸惑いがなかったといえは嘘になりますが、学生時代のアルバイト経験から、私は接客という仕事が好きだと気付いていたので、心配よりも楽しみが勝る転身でした。お客様の笑顔が仕事の喜びという生活に、なんの違和感もなく溶け込んでいます。

お客様の様子を見ながらかける一言やささやかな気遣い、そんな私の行動でお客様が笑顔になってくれる。『また来るね』と声をかけてもらえる、そんな小さな喜びに包まれながら毎日を過ごしています。

家族経営の旅館業ですから、私の仕事は、『何で

も屋』です。

接客、電話の応対、料理の給仕、風呂掃除、温泉の管理、館内の掃除に、大工さん、水道屋さん、電気屋さん、経理、送迎、庭の手入れ、山菜やキノコの採取と、挙げ出せばキリがないくらいです。

日々いろんな仕事に追われ、バタバタとした生活ですが、今になってあらためて感じるのが、農工大で、もっと貪欲にいろいろ学ぶべきであったということです。

私は、お世辞にも真面目な学生ではありませんでした。『自分には関係ない』そう決めつけて、ろくに出席もしなかったような授業がたくさんあります。

庭に植える木を考えると、お客様から山に生える木について聞かれたとき、裏山の杉林の伐採を考えると、専門的な話になると、知識が身につけていないことがよく分かります。今欲しくてしょうがない知識が、在学中にはまわりに溢れていたのです。もったいないことをしました。しかし、後悔していても何も変わらないので、前に進むしかありません。日々の生活の中で、少しずつ学んでいます。

気付けば、こんな山奥での生活も15年を過ぎました。最近では、某宿泊予約サイトの評価で東海地区の旅館で1位に選ばれるという幸運にも恵まれ、多少なりとも、自分の思い描く『温泉宿』というものに、一步一步近づいているように感じています。



私達の宿は同窓会などで使っていただけるような大きな宿ではありませんが、ご家族や友人と、温泉に入っのんびりしたいときに、機会があればご利用ください。

高山市奥飛騨温泉郷中尾436-25 中尾平

電話0578-89-2568

<http://www.nakaodaira.co.jp/>

## 7. 福島の復興に携わって ～国民の大学 農工 OH!～

中川 信次 (農環院 H14)

3.11の大震災以降、滋賀県庁では福島県へ継続的に職員を派遣し、復興への支援をさせて頂いています。当初は避難所支援に始まり、現在は技術系職員を中心に10名ほどのスタッフが現地で汗を流しています。かくいう私も農業土木技術職員として志願し、平成24年4月から平成25年3月までの1年間、福島県庁の支所である相双農林事務所にて勤務していました。そこでの経験を僅かですがご報告させて頂きたいと思えます。

相双農林事務所は太平洋沿岸の南相馬市にあり、福島第一原発から20km程の所にあります。気になる放射線量については福島県では低い方で、健康に影響がないレベルです。ここで、私は農地海岸（干拓堤防等）の復旧事業に従事しました。担当する現場に案内され、破壊された堤防、橋台しかない橋、はがされたアスファルト、建物の基礎しか残っていない集落……それらを初めて見たとき、目に見えぬ放射線へのストレスと相まって、ここは「爆弾でも落とされたのか」というように感じたのを今でも憶えています。

しかし、そのような現場も皆様の献身的な努力のお蔭で少しずつ姿を変えていき、福島を発つ3月末には着実に復興が進んでいることを感じるこ

とが出来ました。反面、外で遊ぶ子供の姿を殆ど見なかったことも印象に残っています。ある日、悪魔の笛吹が現れて街中の子供たちをどこかに隠してしまったかのようです……子供たちがいなくなっ初めて自分たちの行動を見つめ直した大人たちの姿もどこかのお話に似ています。子供たちが安心して暮らせる生活、それがどれだけ幸せなことか強く感じた一年でもありました。

また、相双農林事務所には県外から多くの支援者が詰めており、その中には農工大OBの方がたくさんいらっしゃいました。熱い農工大生の血潮というかDNAを感じずにはられませんでした（ちなみに、平成25年4月より滋賀県から派遣されている職員の一人も農工大出身です）。個人的には時代が変わってもそういう熱さを持った学生が集まる大学であってほしいと願っています。また、1月には福島県職員の方の生産工同窓会にもお招き頂き、飯坂温泉で楽しい一時を過ごしました。お部屋に挨拶に何うと、諸先輩方は既に浴衣でエレキギターを掻き鳴らして歌っておられ、度肝を抜かれたのも思い出の一つです。

3月末の事務所の送別会では、福島県職員の方が「支援者の皆様、福島に来てくれて、その勇気と心意気にありがとう」と大声でおっしゃって下さいました。その時には私も目頭が熱くなるのを抑えられず、福島県の一日も早い復興を願い続



滋賀県から福島県に送られた激励のメッセージ  
(場所：福島県庁玄関ロビー H24.8)

けるばかりでした。

「ふくしまからはじめようFuture From Fukushima」滋賀県から福島県へ送られた激励のメッセージ、これは福島県の皆さんのスローガンです。

復興に留まらず、福島から新しい未来が生まれていくことを期待しています。そして、私はそのことを信じ、これからも福島を応援し続けていきたいと思っています。

## 8. 国立公園づくりを通して

高橋 瑛子 (環資 H22)

平成22年3月に環境資源科学科を卒業後、同年4月に環境省に入省しました。1年目は本省野生生物課でアホウドリなどの絶滅危惧種を、2年目は岡山県の地方環境事務所で瀬戸内海国立公園等の管理を担当しました。3年目の昨年4月からは青森県の八戸自然保護官事務所という新しい事務所で勤務しています。

八戸では、東北地方太平洋沿岸地域（青森県八戸市の蕪島～宮城県石巻市女川町周辺）を新しい国立公園「三陸復興国立公園」として再編成する業務に携わっています。震災からの復興と地域振興に貢献するため、国立公園の創設を始めとした様々な取り組みを担当地域（青森県八戸市、階上町、岩手県洋野町）の方々とともに進めています。

着任後第一弾として取り組んだことは、地元の方々に「国立公園」を知ってもらうことでした。町内会、漁協、企業の研修会、清掃活動、お祭りなどの集まりに参加し、この地域が国立公園になることをPRしました。そんな風に地元の方々と接しているうちに、すっかり地域のみなさんのファンになってしまいました。まるで課員のように空いている職員の席に座らせてくれる地元役場、孫や娘

に接するように話をしてくれる地元のおじさまやおばさま、聞いているだけで心が温まる南部弁。この地域には、素晴らしい「自然」に加えて「人」という非常に大きな魅力がある。豊かな自然の中で、地域の人との出会いがあり、楽しい時間を共有できる、そんな何度でも来たいと思える国立公園を作りたい。強くそう思うようになりました。

そのためには、地元の人々の公園づくりへの参加と自主的な活動が必要です。そこで、取り組み第2弾として、地域の方々が集まり国立公園や自然歩道について意見を出し合うワークショップを開催しました。意欲的な方が多く、地域の魅力、課題、活用方法などについて多くの意見をあげてくださいました。ワークショップの最後には、「おらほ（“私たち”という意味の南部弁）の道になるのだから、みんなで歩いてルートをつくろう！」「公園利用者をおもてなしするサポーターになりたい！」という嬉しい声が聞こえてきました。この「芽」を成長させるために、どのようなお手伝いをするべきか、わくわくしながら考えています。

自然の保全・活用策を検討しながら地域活性化の支援が出来る現在の仕事にやりがいを感じています。環境省に入省したのは、農工大での日々の授業や研究室がきっかけでした。環境アセスの授業では、基幹道のアセス例から利便性・経済効果といった現実と環境の両立の難しさを学びました。研究室では、大学の研究成果を社会へ反映させる必要性を感じました。豊かな自然環境が守られる社会構造を作っていきたい。そのためには、環境行政に直接携われる環境省への入省が最善の道だ、という単純な考えからでした。

農工大での日々は非常に楽しく、充実したものでした。一生の財産である農工大の友人、諸先輩、後輩とのつながりを大切にしながら、将来の世代に豊かな自然環境を引き継ぐため、日々励んでいきたいと思っています。

## IV. 技術に生きる

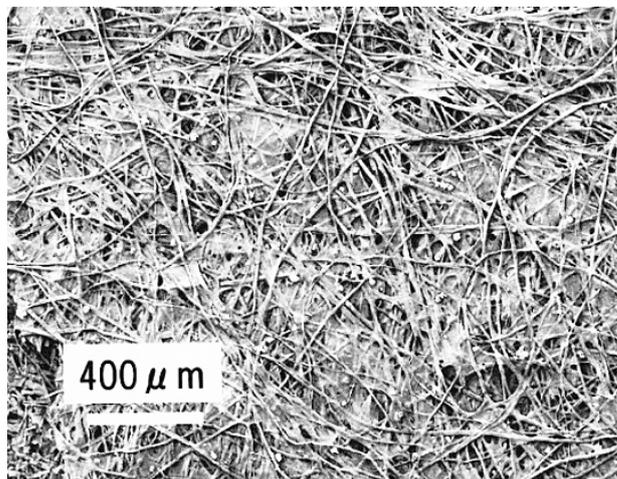
### 1. 和紙と炭と電池の電極

京谷 陸征 (織工 S38)

表題の三つのことばは、相互に関係無さそうですが、落語の三題話をするのではありません。物質の化学的変換とその応用に関する話です。

歴史の教科書によると、紙は中国で後漢の時代（105年頃）に蔡倫がその作り方を確立したと伝えられています。しかしながら、実際はより以前に植物繊維等を使った紙のようなものがすでに存在していたとのこと。日本には奈良時代に製紙法が中国から伝わり、技術的に発展して、麻、コウゾ、ガンピ、ミツマタ等の植物の韌皮繊維（主成分はセルロース）等を原料とする日本独特の和紙の製法が確立し、流し漉きのような独特の抄紙技術が確立しました。

和紙は、木材パルプを主原料とする洋紙と異なり、添加物やケミカルな処理が殆ど無い比較的純粋に近いセルロース（ヘミセル、ペクチン等は前処理で殆ど除去）の紙で、独特の強度や感触を有する不思議な魅力のある紙です。そして何よりも日本の歴史と文化に非常に貢献した素材であり、源氏物語も古今和歌集も和紙に記されています。日常的に使用する和紙である障子紙の丈夫さにはいつも不思議に感じていました。繊維工学科に在学していたので、和紙を構成する繊維の構造には以前から興味がありました。幸い生まれ故郷には因州和紙という特産品があったので、機会があれば繊維構造を調べるつもりで、折に触れて面白そ



和紙からの炭化紙表面の電子顕微鏡写真

うな和紙試料を集めていました。

しかしながら、高分子といえば、ポリオレフィン、ポリアミド、ポリエステル等の石油系合成高分子の全盛時代なので、天然高分子のセルロースを主成分とする高分子材料に関する仕事をする機会はなかなかありませんでした。さらに和紙の場合、代々伝えられている伝統技術を基盤としており、未公開部分が多くあり、再現性と普遍性が必要とされるサイエンスの研究対象にはなかなかなりにくい素材です。洋紙の場合は製品として確立しているので、多くの研究がなされていますが、和紙の製法や構造物性に関する研究論文は殆どありません。

たまたま炭素材料関係の仕事をする機会があり、にわか勉強で炭素材料に関する文献を調べました。ここで念願の和紙の出番です。数人の共同研究者や鳥取県産業技術センターの研究者の人達の協力もあり、いろいろな試行錯誤の中で、室温で気化したヨウ素の蒸気に曝した和紙（ヨウ素/

デンプン反応と類似)を高温炭化すると、結構ハンドリング性の良い多孔性炭化紙が得られました。木炭作りでよく知られていますように、セルロース系材料は高温での炭化において熱分解が生じ、低分子量化・ガス化等により、質量減少が激しく、最終的に元の重さの20%以下の脆い炭化物(炭)が得られます。しかしながら、上記のヨウ素処理和紙の炭化では、熱分解が殆ど起こらなくなり、炭化収率も30%以上の比較的丈夫な炭化紙となりました。各種測定データの分析の結果、ヨウ素は高温炭素化反応において、熱分解を抑制する触媒的な役割を果たしていることがわかりました。

画仙紙という種類の和紙があります。ワラ、竹、ガンピ等いくつかの植物繊維の混合物の紙で、いわば、ブレンド和紙です。これから意外と良好な炭化紙が得られます。その他サイザル麻、マニラ麻、亜麻等の各種の麻紙からも良好な炭化紙が得られます。

黒鉛はバンドギャップがゼロなので、半導体以上の導電性があります。同じように和紙からの炭化紙も、 $sp^2$ 系炭素同素体なので、導電性を有しています。安価で軽量で、しかも、環境にやさしい新規の導電性材料です。この炭化紙を知り合いの燃料電池の研究者に渡しておいたところ、電極として使用を試みたら、ほぼ通常、試料によっては通常以上の発電が可能であったという返事がきました。

この結果を学会で研究発表しましたところ、燃料電池車(電気自動車)の開発を進めている某大手自動車会社の担当者の方が研究室まで訪問に来られたのには、少々驚きました。単なる情報集めだと思いますが。この電極の部分には既に市販炭素繊維製の「カーボンペーパー」という立派な市販品がありますが、非常に高価なのがひとつの問題だそうです。この辺で表題の話が終わります。

## 2. 研究者としての縁 (卒業時の思い出)

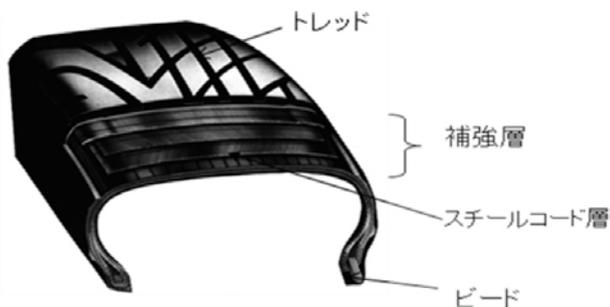
石川 泰弘 (製糸 S41)

農工大の卒業時のことなので、40数年前のことであるが、卒業式の最後に井上吉之学長より次のような祝辞があった。時間はせいぜい10分程度であったが、印象深いものであった。“諸君は今日大学を卒業するが、大学で自然科学を学んだ技術者ということで指導的役割を果たしてもらいたい”として次のような話をされた。戦前のアメリカにラングミアという研究者がいた。彼は大学を卒業してGEに入り、電球の開発をした。当時はエジソンの時代のあとですでにタングステンは開発されていたが、金属ゆえ照明時間とともに焼き切れてしまった。そこで金属の酸化を防ぐために電球内の酸素を取り除くべく減圧を繰り返した。それによって寿命は延びたがやはり切れてしまう。そこで金属表面を調べたところ金属表面に吸着された酸素は減圧によっては容易にとれないということを見つけた。そこでランプ中に窒素ガスを封入することによって金属表面の酸素を窒素に置き換えた。このことによって長寿命化に成功し、今日のガス入りランプができたという。ここで重要なことは、ランプの寿命を延ばすというようないわば泥臭い仕事も一歩下がってサイエンスの目で見ることによってものの本質に迫り、科学的解決策を得ることが出来るということである。ラングミアは表面の化学(界面化学)の創始者としてノーベル化学賞を受けた。

私は卒業後修士課程の研究室で有機物の表面の問題を取り扱い、さらにタイヤ会社に入社し、タイヤの研究開発に長く従事した。タイヤはスチールコードや繊維を補強材として内部に配置してい

る（下図）。この種の補強材と周りのゴムとの結合は、両者の表面間に化学反応を起こさせて接着補強している。またゴム中にはゴムの強度、摩耗性向上のためにカーボンブラックを配合しているが、この補強剤とゴムの間も物理的接着が行われている。接着層の強度は製品の耐久性に関係するが、スチールコードのような場合化学反応によって無機の反応物が生成するので、その強さは組成、結晶性（結晶の構造、結晶性など）に依存する。つまり広義の界面問題である。タイヤは車の荷重を支え、走る、止るなどをしなければならない。車の重量は乗用車の場合1～2トン、建設用車は数十トンにも達する。また雰囲気温度についても航空機タイヤの場合1万メートル以上の高さを飛んでいるときはマイナス数十℃であり、着陸時には瞬時に煙を吐くほどの高温（100℃以上）になる。

このように荷重、温度の過酷な条件に曝されても破壊しない耐久性が要求されるが、この根本的な保証は材料表面間の接着界面反応物の強度を向上させることによって達成して来た。例えば大学の卒業時に界面化学の洗礼を受け、その後、タイヤというまさに泥くさい商品の界面技術に従事し、研究開発、商品開発をしてきたということに深い縁を感じる。



タイヤの断面図

### 3. 「地方試験場の研究室」曲折記

村田 公夫（農工院 S47）

群馬県で農業試験場を中心に公務員生活を35年間つとめ、退職して5年目を迎えます。振り返って見ますと、赤城山のすそ野に広がる試験場の圃場をベースに、大学で学んだ「農業機械」の仕事を30年近く続けましたが、なにやら不思議に思えてきます。というのも、専門とした「農業機械」は、地方の試験場において、担当する職員が少ない分野であり、研究室として組織されていたのは全国で10数県、退職する頃には、その半分以上にまで勢力を減らしていたからです。

地方の試験場は、社会の事情により幾度となく組織の見直しが行われ、専門試験場化と総合試験場化を繰り返してきました。しかしながら、勢力の小さい分野では、その都度、研究室の減員や廃止が俎上に載せられ、それらを免れようとして室の名称変更を余儀なくされることがあります。組織を守るには、現場に役立つ研究実績を上げるのは当然として、名称変更も、存在をアピールする意味で思いのほか重要であったりします（思い込みかもしれませんが……）。

そのようなわけで、私が所属していた部署においても、都合3回の大きな変更を経験しました。最初は「農機具科」から「農業機械課」、次いで「機械作業課」、最後に「機械施設グループ（係）」の順です。後半の2つについては、私も名称変更に関わりました。

名称変更にあたっては、研究の方向性を示しながら、できれば時代を先取りした用語が入り、しかも、その名称が最低10年位は色あせない、などに気を配りながら、考えを巡らしたものです。その際、同じ専門分野の研究を展開している国（独

法)の研究機関、大学などの組織の名称が、大いに参考になりました。ところが、平成15年に取り組んだ最後の名称変更の際には、国の研究機関では専門部署が再編期にあたり、頼みとした大学では旧来の専門の枠を超える様な名称が展開されていました。ちなみに、大学の農業機械部門は「地域生態システム学科」内に組織されていたように記憶しています。生産現場を抱える地方の試験場にとっては、ハードルが高すぎてしまい、取り込むことは叶いませんでした……。

そのようなわけで、「機械施設グループ」は、

目立った施設もなく圃場しか研究基盤を持たない中で、苦し紛れの産物となったのです。このように『体を表さない』名称であっても、一旦決めると簡単には変更できないもので、10年目を迎えています。ところが、最近になってグループの関係者から、『今後、水田圃場を切り離し、施設利用を含めた園芸作の機械化に軸足を移す』という知らせが届きました。研究フィールドの大きな変更を案じつつも、時代に流されずスムーズに研究が進化することを、ただ、祈るのみです。

murara.ki@gmail.com

## よもやま話 1

### 生死の挟間で幻覚が訴えかけたもの

関口 英樹

(物生 H10)

先日、数年ぶりに農工大の文化祭に顔を出しました。農工大で過ごした懐かしい四年間の記憶がよみがえり、それがきっかけで、同窓会に入会させていただきました。ひねくれ者の私は卒業後、理系職に就かず、予備校講師・法律事務所などの勤務経験を経て、現在は社会保険労務士・行政書士として独立開業しております。遺産分割協議書・遺言書などの相続関連が主な業務です。各地でセミナー講師としても活動しています。

セミナーを自分で主催し、開催することもあります。ある日、世にも恐ろしい？セミナーの案がひらめいたのです。「四谷怪談と知って得する相続」と題し、寄席とセミナーを夏に開催しようと企画しました。節電の夏に涼しいひとときを考えたいのです。女性の講師の方をお招きし、二部構成のセミナーです。第一部で講師の方に「四谷怪談」の講談をしていただきました。第二部で私が「四谷怪談よりコワイ？あなたの相続」と題し、遺産分けの手順や方法についてお話ししました。

第一部の講談の内容は泣く子も黙る四谷怪談の始まりであるお岩様出生秘話のお話です。お岩様は生まれる前から、恐ろしかったのです。第二部の私のセミナーの内容は、相続についてです。一生において、数回しか経験せず、もめたとしても他人に話さないことが多いため、勘違いされている方が多いのが現実なのです。一歩間違えば、身内の縁も切れてしまうというコワイ？内容についてお話ししました。

開催の十日程前、九度近い高熱を出し寝込んでしまいました。意識はもうろうとし、夢なのか、現実なのか、区別がつかない状態で、うなされながら眠りについたのでした。

ふと、気が付くと、誰もいない真っ暗な夜の草原にたった一人で立っていたのです。初夏の生暖かい風が吹き荒れています。前を見ると私の視線の先には、古びた井戸があります。何気なく、その井戸を見つめてみると、井戸の中から、真っ白な死に装束を着た若い女性が這い上がってきたではありませんか、その女性は井戸の中から青白い顔で、こちらをじっと見つめています。私は驚きのあまり身動きできず、ただ、見つめ返していることしかできませんでした。すると、その女性は手招きをしているではありませんか。

『しまった。』

十日後に開催する寄席「四谷怪談」が原因だと気付いたのでした。四谷怪談関連の催しを開催する際、四谷稲荷にお参りをするとすることは一般に認識されているとおりです。風邪を治し早速、お参りに行って来たのでした。お蔭様で寄席・セミナーは好評で、皆さん夢中になり、身を乗り出して聞いておられました。これを戦国時代から続く、日本の伝統芸能の力なのだと感じました。本セミナーは好評につき、第二弾を開催予定で。ヒヤッと体験、できましたでしょうか？

## V. 人生これから

### V-1 輝く第二の人生

#### 1. ボランティア活動10年を通しての雑感

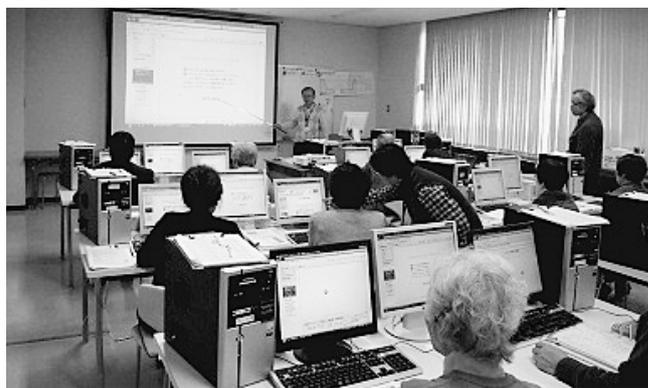
大沼 紀幸 (織工 S38)

定年後の地域活動として、パソコン指導のボランティア活動を続けて11年目を迎えている今日この頃です。2002年5月に発足した「高槻ボラパソ」に設立当初から40名の仲間の一員として参加しました。この組織は、高槻市との協働事業ということでスタートしました。当時は、パソコンが世の中に浸透してきた時代で、会社によっては早いところで、一人1台の時代になり、インターネットが発達してきて、日本でもパソコン社会になろうとしていた時代です。定款に謳われた目的は、高槻市民で特に高齢者でパソコンに触ったことのない人を対象に、ちょっと努力すればインターネットを通じて情報社会に参加できますよという、情報格差（デジタル・デバイド）解消を目指したものです。パソコン教育を生涯教育としての位置づけではなく、情報格差解消という人権問題という視点でとらえる非常にユニークな試みの活動でした。

超初心者対象ということで、自分等で専用のテキストを作成しました。パソコンが出来ることとパソコンを教えることは全く別次元の話だということ等の苦勞もありましたが、12名の受講生に、講師とアシスタント2名という3人体制で、20時

間の講座において、テキスト代込みで4000円と低価格でもあり、何よりも懇切丁寧に指導するということで、高槻市広報で募集すると、受講生が殺到してなかなか順番がこないと怒られたりしました。

講座終了後の受講生ののっぴりした顔がボランティア活動の最大の報酬です。



パソコン講習会の状況

2003年9月には大阪府より、「特定非営利活動（NPO）法人高槻ボラパソ」として認証され、現在も活動を継続しています。

そもそもボランティア活動は1995年の阪神・淡路大震災から日本に定着したと言われています。2011年3月11日の東日本大震災でも多くのボランティアが活躍しました。日常的には小学生登下校時の交通ボランティア（セーフティーさん）等で多くのボランティア活動がされています。

我々の活動もボランティア活動ですが、10年余継続して活動していると、時代の顕著な変化が見えてきました。現在、47名の会員が活動しています。大体男女半々ですが、男性は殆どが定年退職者です。この定年退職者にとって、長時間が取ら

れるボランティア活動に対して、この2、3年希望者が激減してきました。年金受給開始年齢が60歳から65歳への延長に伴い、会社に長いこと勤めた定年退職者がボランティア活動より、自分の趣味の世界に入る様になったためと分析しています。家庭菜園、絵画、ハイキング、ダンス、旅行等々の趣味活動は非常に活発です。

現在、新会員の募集に非常に苦労していますが、パソコン指導のボランティア活動を定年後の活動として非常に意義を感じており、元気なうちは継続したいと考えています。

## 2. ただいま林業の担い手育成中

白井 久 (林 S44)

昭和44年3月に本学の農学部林学科を卒業後、埼玉県庁に奉職し、森林、林業、自然保護、土木などの業務に従事し、平成19年3月、森林・緑化森林研究所を最後に退職し、縁があって社団法人埼玉県木材協会（平成24年4月1日から一般社団法人埼玉県木材協会へ移行）に就職し、同時に、木材協会と同じ事務所内にある「林業・木材製造業労働災害防止協会（略称「林災防」）埼玉県支部」の業務も行うようになりました。

木材協会では、埼玉県産木材の普及啓発やJAS検査・監査等の業務に従事しました。JAS関係については本誌第80号で紹介しましたので、今回は林災防の業務を紹介したいと思います。

林災防は昭和39年6月29日に施行された労働災害防止団体法に基づいて設立された林業関係の労働災害防止団体で、その後平成元年の法律で特別民間法人となっています。

ところで埼玉県支部の業務ですが、安全衛生講

習会の開催や巡回安全指導パトロールの実施、チェーンソーや刈払機などの振動機械を常時使用する林業事業体の従事者を対象とした特殊健康診断事務や各種講習会（チェーンソー、刈払機、木材加工、はい作業）の実施、その他防災用具、図書、DVDの販売があります。

さらに、平成21年度から「緑の雇用事業」という、新たに森林組合などの林業事業体に就職された方々を対象に、チェーンソーによる伐倒作業の指導や刈払機による下刈り作業等の安全指導を行っています。また、平成22年に林野庁長官から安全管理指導専門家に認定され、集合研修という形で研修生全員に安全教育の講義を行っています。

全国では、平成15年度から緑の雇用事業が始まり、今までに約1万2千人（平成22年時点）が研修を終えられ、林業の担い手として活躍されています。1年目の研修生はチェーンソーや刈払機の操作に慣れていないため事故が多い状況にあり、私の担当した1年目の研修生が直径30cm、高さ約15mのスギの木を伐倒中、最後の追い口切りをしていたところチェーンソーが木に挟まった状態で抜けなくなりました。すでに木は倒れ始めているのに、まだ抜こうとしているので、「逃げろ」と大声で合図して、研修生は逃げ重大事故にならずほっとしたことがありました。

緑の研修生を含めた全国の林業の担い手数ですが、昭和45年には約20万人いましたが、平成17年には約4万7千人まで激減し、また65歳以上の高齢化率も26%（平成17年）と全産業の高齢化率9%に比べ高く、一方、若年者率は全産業は30%で林業は13%ですが、農業や漁業に比べて上昇傾向にあります。

ご存じのとおり森林は、すい源かん養、土砂崩落防止、二酸化炭素を吸収する地球温暖化防止などの機能のほか、最近では東日本大震災後の政府復興方針で「沿岸部の復興にあたり防災林も活用

する」と明記され、海岸防災林の減衰効果等が期待されています。

日本の森林は国土の3分の2を占め、広葉樹を主体とした天然林とスギ、ヒノキなどを植栽した人工林（約1千万ha）があります。林業の担い手が今後いなくなると人工林の森林整備が行われず、荒廃していき森林の持つ多面的機能が損なわれてしまいます。

そのため、若く意欲のある人達を一人前の林業担い手にすることは重要で有意義な仕事だと感じ、これからも微力ですが安全指導等を通じ大事に育てていきたいと思っています。



林災防止研修の状況（伐倒作業）

### 3. 泉の森をふるさとの森に

大濱 昭（農工 S45）

神奈川県大和市には、「泉の森」という42haの市内最大の緑地があります。ここには、全長21kmに及ぶ引地川の源流地域があり、最上流には水源地の池があります。かつて、水田があった谷戸は水辺の湿地帯になっており、ここを囲むように両側に雑木林やスギ・ヒノキの植林地が形成され、里山の面影を留めています。そして、この中

心部に自然観察センター「しらかしのいえ」があり、森の自然情報を手軽に見ることができます。同時にここでは、市民による緑地保全のためのボランティアの拠点として利用され、市民に様々な形で緑地の理解促進を図っています。自然観察センターは市・財団・市民ボランティアの三者が運営委員会を組織し、協働で運営しています。

私はここの市民ボランティアとして、ボランティア協議会設立以来、17年間携わっており、現在、会長をしています。登録ボランティアは毎年100人前後で推移しており、植物観察、野鳥観察、森や川の管理、生き物調査など9つのグループがあります。ボランティアはどれかのグループに所属しており、ここ数年、年間の活動実績は延べ2千人を超え、幅広い緑の保全活動に取り組んでいます。行政と市民を結ぶために果たしているボランティア協議会の役割は少なくないものと思っています。

私が所属しているのは、「自然あんない部会」というグループで、主に月一回「自然とあそぼう」という行事を行っています。これは親子を中心にゲームやクラフトなどを通じて、楽しみながら身近な自然に親しんでもらおうというものです。今、子供たちは自然に直接ふれる機会が大変、少なくなっています。かながわ環境大使を務める歌手の白井貴子は「子供の頃、自然にふれる経験が少ない子は大きくなると宇宙人になってしまう」と述べています。大人から理屈を教わるのではなく、心が柔らかなうちに野の草花や虫たちを見て、触って、自分で感じる事が大切だと思います。我々はそのきっかけづくりをしています。昭和30年代に幼少期を過ごした私のような中高年者にしてみると、バッタやセミを捕えたり、懐かしい追羽根遊びなど当たり前だったことが日常生活から消えつつあります。参加者は行事を通して、身近な自然の素材であそぶ楽しさを学び、

森とのつながりができてきます。

森の大切さを知ることの第一歩は、そこに生きている植物や虫たちと友達になることではないでしょうか。大人になった時に、森を守ってくれる応援団になってくれる子供たちを一人でも増やすことが私の願いです。そして、泉の森が地域のふるさととしての森として、次の世代に受け継がれていくことを願って活動を続けています。

ご興味がある方は、HP検索「やまとナビ しらかしのいえ」および「泉の森 自然とあそぼう」を覗いてみてください。



広場で「春の草花あそび」

#### 4. 第二の人生に生きがいを求めて

山崎 正澄（織高 S46）

昭和46年に農工大工学部を卒業し、繊維関係の民間会社に就職。平成19年に60歳で定年退職後、継続して派遣社員として後輩社員の指導業務をしていましたが、何か物足りなさを感じ、このまま65歳まで勤めても充実した人生が過ごせるのか不安でした。

その時、会社で通信教育講座パンフレットに目が留まり仕事に関係のない「2級ファイナンシャ

ルプランニング技能士受験対策講座」を受講することにしました。5か月間の講座を修了して、ファイナンシャルプランナーの仕事が人の役に立つ仕事であることが分かり、平成22年退職し、独学で勉強。その年に「2級ファイナンシャルプランニング技能士」\*1（国家資格）を取得しました。

\*1「ファイナンシャルプランナー」の仕事とは個人や家族が安心して暮らせるために家計に関する金銭的な裏付け作りをアドバイスする「家計のホームドクター」のようなものです。

ところが資格を取得しても実践経験が浅くファイナンシャルプランナーの社会的地位が低いこともあり、すぐにお客さまからの相談業務の仕事はありませんでした。今後は高度な知識と技能、十分な経験と倫理観を身に付けて、いつか独立系ファイナンシャルプランナーとして活躍していきたいと思っています。

しかし、目標を失いどうしようかと悩んでいたところ、知人の紹介で「健康生きがいづくりアドバイザー」\*2（財団法人 健康・生きがい開発財団）のことで知り2か月間の養成講座を受講して資格を取得しました。

\*2「健康生きがいづくりアドバイザー」とは中高年齢者の在職中とリタイア後における健康生きがいづくりを企業や地域で専門的に支援するコンサルタントであり、他の機関や専門の職域などをつなぐコーディネーターでもあります。

現在、神奈川健康生きがいづくり協議会（一般財団法人）の一員として活動していますが、最近、同じ活動している仲間の先輩が「ノルディックウォーキング」\*3を通じて各地でグループを立ち上げ「健康づくり」「生きがい」の支援活動をしていることに刺激をうけて、私も「ノルディックウォーキング」に興味があつて講習会に参加することにしました。

\*3「ノルディックウォーキング」とは約80年前にクロスカントリースキーツームの夏場のトレーニングとしてフィンランドで始まったものです。ポールを使

うことで全身の筋肉をたくさん刺激するので、普通のウォーキングよりエネルギー消費量が20%も増加する体力づくり、スタミナアップ、減量などにとっても効果的なウォーキングのことです。

私は定年直後、狭心症になったことにより、健康維持のために週に2回ほど1時間、トレーニングをしています。ノルディックウォーキング講習会に何回か参加した結果、姿勢がよくなり、腰痛も治ってきました。体力が落ちて歩くのが億劫な高齢者には大変いい運動であると実感しました。私も「ノルディックウォーキング」を通じて地域の高齢者への支援活動ができると考え、現在、「ノルディックウォーキング」指導者養成研修を受けています。

指導者研修後に資格取得したインストラクターを生かし、私が住んでいる町にノルディックウォーキングを広めて、多くの高齢者が楽しいウォーキングによって、介護に頼らず健康で元気な生活ができますよう支援活動をしたと考えています。

でも、今になって思うことは、会社で働いている時、定年後のことなど少しも考えていませんでしたが、定年になって「さあ、第二の人生をどう過ごすか？」と考えてもその時は手遅れだと感じました。

「若い人に伝えたい」……不透明で大変な世の中ですが、若い時からライフプランを設計し、将来の目標に向かって、充実した生きがいのある人生を過ごして欲しいと思います。



ノルディックウォーキングの光景

## 5. 平居雑記 英語活動「ハローフレンド」12年

宮城 清 (MOT H19)

私の子供がお世話になった町田市立小川小学校で英語活動「ハローフレンド」を創設して12年になります。「目が輝き、歓声を上げる。若鮎が飛び跳ねる」。

「ハローフレンド」で私が何時も味わう、子供達が与えてくれる躍動のひとコマです。

私が「ハローフレンド」に係わったのは、小川小学校から「学校教育ボランティア活動の募集」の「国際理解と交流、外国語による日常会話指導」が目にとまりました。

これならば、私の体験した英語を通して、少しはお手伝い出来るのではないかと思い、校長先生に私の考えをお話し「ハローフレンド」と命名してスタートすることになりました。

私は会社在籍中、英語を使わなくてはなりませんでしたが、ご多分にもれず英語には苦労を重ねました。自分の能力を先ず問うにしても、コミュニケーションの道具としての英語にこれほどまでに難渋しなくてはならないのは何故か。これが私の英語習得に対するテーマでありました。

このようなコミュニケーションのための英語習得の苦しみを少しでも、軽減する方法の1つとし

て、年齢が低い段階から楽しみながら、自然に、生きた英語の世界になれ親しむ場を与えること。そうすれば、子供達は自分の言葉の世界を創り出して行くに違いないと、私自身の子供の言語の発達過程を通して感じておりました。特に幼い時は、英語は勉強ではなく、歌であり、ごっこ遊び、ゲーム、物語や劇など、楽しい遊びの英語空間にふれる体験とその量が大切な要件と考えております。

「ハローフレンド」の活動は毎月1回、授業時間外の1時間行っています。出来れば、英語のネイティブスピーカーの参加が重要であり、私の願いでもありました。最初は外国出身のお母さんに手伝っていただきました。現在はALT（外国人英語指導教師）と英語経験のある2人のお母さんと一緒に活動しています。

ALTはプロとして子供達を楽しませるコツを心得てた遊びやゲームで「ハローフレンド」を楽しめる世界に誘ってくれます。2009年3月、文部科学省の「英語授業に関する新指導要領」が告示されました。

2011年より小川小学校は5、6年生を対象に英語教育が実施されました。

「ハローフレンド」が発足して11年後であります。

幸いにも、「ハローフレンド」の活動に対して、町田市教育委員会より感謝状をいただくことになりました。英語活動に係ったひとりとして、大きな励みになりました。これからも更にアイデアを出し合い「ハローフレンド」を楽しめるワンダーランド（おとぎの国）に創り上げて行きたいと考えています。

そして、「ハローフレンド」から巣立った子供達が将来、必ずや国際社会に於いて、堂々と英語で、意見を交換し、国際時代に大いに羽ばたくことを期待しています。

「ハローフレンド」の子供達に幸あれと願って

やみません。姿あるものに、心が欲しい。「ハローフレンド」の歌が欲しい。

「ハローフレンド」の子供達は跳びはね、歌い、笑い、天から舞い降りたエンジェルであります。

この至福の時空が「ハローフレンド」“空に羽ばたく”の歌になりました。

「ハローフレンド」 “空に羽ばたく”

「Hello Friend」 “Flying off into sky”

作詞：宮城 清、編詞/作曲：とびたつ会

楽しく歌って Happily singing

元気に踊って Cheerfully dancing

みんなが楽しい Everyone's happy

ハローフレンド Hello Friend

手をたたいてタン-タ-タン

Clapping tan-ta-tan

輪になってサークリン

Dancing in circling

みんなで跳ぼうレッツジャンプ

Let's jump together, let's jump

ハローフレンド集まろう

Let's get together, Hello Friend

楽しく歌って Happily singing

元気に踊って Cheerfully dancing

みんなが楽しい Everyone's happy

ハローフレンド Hello Friend



## V-2 人生いろいろ

### 1. 卒業後半世紀を越えて

勝田 謙次 (織化 S34)

2年前同窓会総会に出席するため国分寺駅に降りた途端その余りの変貌にしばらく戸惑いを覚えた。昭和34年の卒業式以来ほぼ半世紀ぶりの再訪であったからまさに今浦島の心境であった。

当時はプラットホームからも近くに雑木林が見え、駅舎も鄙びた佇まいで全体に武蔵野の面影が残っていたように記憶している。

ちなみに東小金井駅はまだなく、小金井駅からバスか徒歩で繊維学部（現工学部）まで通学していた。もっともバスは便数も少ないのでほとんど徒歩であった。

東京生まれの東京育ちであるが、就職したのが合繊メーカーで、ほとんど地方の工場勤務であったので、上京するのはせいぜい1年に1回、したがって昭和39年の東京オリンピック開催以降都心部が大きく変貌したのさえ長い間あまり実感としてなかった。

入社して最初に赴任したのは静岡県の工場、毎日富士山を仰ぎ見ながらの出勤は朝から清々しい気分にしてくれた。

しかし今でも頭から離れない思い出は、配属したばかりの職場で発生した死亡事故である。その対策後始末におおわらわの職場を身近に見て、安全の大切さを身に沁みて感じさせられた。その後生産現場の管理を担当することになっても「安全第一」を管理の基本として生涯心に留めることになった。

入社して4年後愛媛の工場へ最初の転勤をした。当時は勿論、本州四国連絡橋はなく、神戸港から夜

松山港に向けて出帆した時は島流しであったような心細さを覚えた。

3回目の勤務地は大阪で営業と接触する機会が多く、関西弁のぼけっつこみの世界は1種のカルチャーショックであった。

大阪に約10年勤務の後、韓国の合弁会社へ出向した。赴任して間もなくいわゆる水が合わなかったのか腸チフスに罹り、40度の高熱で1週間寝込んだときは、このまま生きて日本の土を踏めないのではないかと悲観的になった。さらに亀尾から大邱に退勤時高速道路上で追突事故にあった。直ちに大邱大学病院へ行きレントゲン検査を受けた結果、幸い異状なく鞭打ち症も大きな後遺症にはならず済んだ。

2年余りの韓国出向の後、滋賀へ転勤となり更に福井に変わった。初めての日本海側の生活で、豪雪にも会い、雪国の筆舌に尽しがたい厳しさも体験した。

その後最後の勤務地が気候温暖の静岡になったので一層北陸地方の冬の厳しさが分かった。奇しくも会社生活の最初と最後が静岡になった。

36年余りの会社生活で7回の転勤とその間14年間の单身生活を経験した。

同期の繊維化学科卒業生でポリメル会という名の会をつくり、毎年主として東京で会合がもたれた。私は東京から離れていたもので、めったに参加できなかったが在京の幹事のお陰でニュースは書状メール等で知ることができ精神的に大きな拠りどころとなって支えてくれた。最近では京都、岡山、浜松と地方で集まりを持っているが、仕事で多忙な時に感じていた以上に同窓会の精神的支えの役割が大きいことをしみじみと痛感している今日この頃である。



## 2. ジャングルに魅せられた独立行路

小橋川朝政（織高 S49）

工学部建築学科卒、これが私の最終学歴のようです。勿論、そんな学科は今も昔も我が校にはありません。学校を卒業して名古屋の大手自動車メーカーに勤めました。しかし事情があって二か年足らずで辞め、帰郷（沖縄）しました。その際に建設コンサル会社に再就職し、履歴に建築学科卒と記載されたのです。勿論、私が記載したのではなく、会社が相手先（行政団体）に提出する技術者の経歴書に、です。まあ、それほど熱心に学業を積んでいなく、部活（剣道）に明け暮れた日々でしたが、何かしらの屈辱感を覚えました。

それでも私は何を狂ったのか建築の勉強をしました。正確に言うと都市計画です。これが面白いのです。簡単に言えば外に出っ放しが多いのです。実験で中に居るより性にあってました。さらに沖縄にはジャングルがあるのです。それも本格的なジャングルです。上京するまでは交通が発達していなく、離島や僻地に行くのは時間と金がかかり、知らないのです。それが一般的でした。商売替えをしたら、そういう地域を飛び歩くことになり、自分で言うのもおかしいですが、私の知らない、魅力的な沖縄を知ったのです。今では県外の人にも知れ渡っていますが……。

それから、またまた狂いだして、会社の給料が安いので独立することにしました。高校の同級生が銀行に勤めていて、車の購入費の借入を申込みに行きました。すると、同級生が私の所得のあまりの安さに驚愕したのです。今回のトヨタの年間賞与205万円程度でした。当然、勤めていた会社の賞与は微々たるもので、無いに等しいものでした。土曜日も休暇どころか半ドンでもありませ

ん。当然、銀行の同級生からは断られ、会社に戻り、そのような状況でも黙々と働く同僚をみて、私はマルクス経済学を信奉する気になりました。そして、資本家になるべく会社を立ち上げました。

また、そこからが大変で、仕事が来ません。殆どが行政団体ですので、どこの馬の骨かわからないものに仕事を与えません。すると、他の会社ができない仕事が舞い込むのです。離島の僻地や未踏の観光地域の計画・調査です。わからない仕事もできると言うのです。さあー、それからです。また、独学です。しかし、それでも面白いのです。“窮すれば通ず”で何とかなるものです。

地方では組織らしい組織は有りません。また、好きな仕事をするには独立（零細事業所）を強いられるのです。

組織と言う防護服を持たない私は“金に目が眩んで”努力することが求められます。それで約30年が過ぎました。私はまだプチブルで資本家



になり得ていません。何時になったらなれるのか、夢見ています。駄目でしょうか……。

参考までに沖縄の素晴らしいジャングルの一端を紹介します。

前ページ上の写真は60才を過ぎてもジャングルに彷徨う私です。後続する同伴者に寄れば私の後ろを“ハブ”が横切ったそうです。

同じく、前ページ下の写真は終着点の美しい湖水です。いずれも本島北部の“タナガー（海老）、 Gumイ（水溜り）”と呼ばれる地域です。以前は海老が多く取れました。

### 3. 定年を迎えて…… そして、あの頃に戻って

吉野 明（織高院 S54）

私は1979年 大学院・繊維高分子工学専攻を修了し、(株)フジクラ（旧 藤倉電線）に入社しました。フジクラという会社をご存知でしょうか？ 光ファイバー、電力ケーブル、自動車用ワイヤーハーネス等の電線・ケーブル類、あるいは携帯電話等に用いられるフレキシブルプリント基板などを製造する総合電線メーカーです。農工大からは初めての入社でした。入社後は材料研究所に配属となりケーブル材料開発の仕事を開始しました。

そんな中で迎えた1982年です。1982年のフォー

クラウド紛争、アルゼンチンの航空攻撃 エグゼ・ミサイル一発でイギリス戦艦が沈没したことをご存知でしょうか？ 検証の結果、この原因はミサイルの破壊力ではなく、ケーブル火災だったことが判明しています。フライ料理中の油が火元となってケーブルを伝わって火災が伝播し、発生した煙と有害ガスのために消火活動ができず沈没に至ったのです。イギリスでは作戦発動中のフライ料理が禁止になったとか……。

日本では、直ちに、艦艇（日本では戦艦と言いません）に使われるケーブルの見直しが始まりました。新しいケーブルを開発するのは忙しいけれど、充実した毎日でした。開発の成果を持って通った長崎、それはすばらしい街でした。仕事の一環と称して仲間を巡ったグラバー邸、オランダ坂……、また、お客様との夜では「長崎皿うどんにはソースか！ 酢か！」の激しい？ 議論？ と楽しい思い出が詰まった時期でもあります。開発した新しい低災害難燃ケーブルが採用されたのが左下写真にある護衛艦 DDG「はたかぜ」、日本の革新的な艦艇第1号です。

34年の長いフジクラ生活を続けて昨年2月に満60歳定年になりましたが、過ぎてしまうとあっという間に感じられるのは不思議なものです。私が入社して以来、これまでに35人の農工大生がフジクラに入社しています。これからも新しい農工大生がフジクラで活躍してくれることを願っています（私もまだ続けて働いていますが）。



あの頃に戻って…  
東京農工大繊維高分子工学科を1977年に卒業した仲間が（1978年に卒業した人もいますが）今宵も楽しいひと時を過ごします

さて、私の同窓はというと、1977年繊維高分子工学科卒30人です。アパレル、銀行、公務員、特許事務所、塾・予備校、大学等々の多方面で活躍中です。2005年頃だったのでしょうか、卒業後初めて同窓宴会がもたれました。それがきっかけとなって、毎年2回ほど有志が集っています。あるときは都内で宴会、あるときは箱根、修善寺といった会社の保養所を利用した一泊同窓会 プラス 有志ゴルフコンペです。長野の山深いところまで行っての松茸三昧、あるいは露天風呂三昧ということもありました。大学を卒業後に様々な人生を経て、昔の仲間がこうして集まって「あの頃に戻る」のは本当にいいものです。これからも長く続けていきたいと思えます。

## 4. ひよんなことから

岡崎 恭久 (農化 S58)

文部科学省の2012年12月発表によると、40人学級1クラスに2、3人の割合であるとの調査結果が出ました。

発達障害の可能性のある小中学生の児童生徒数の割合6.5%、全国の推計約60万人ということです。

ひよんなことで、今年の内からそうした障害をもつ子どもの支援事業を始めることになりました。で、まだまだこの先、どうなるのか見通しが不明瞭ですが、いまは、たれもつう（土佐弁で大変忙しいの意）毎日を過ごしています。

少し時間を遡ります。2002年頃から十年間、ひよんなことから、人材紹介業務に就きました。当時、仕事の付き合いのあった方から、四国にある大手製薬会社グループ内のリストラに伴う再就

職支援を手伝ってもらえないか、というのがそのきっかけでした。そのグループでの業務を3年間、その後、四国4県の転職希望者支援や東京からの四国へのUIターン就労支援、高校生や大学生の就職支援業務等を経験しました。

さて、また時間を遡ります。1988年。バブルに向かい始める頃、長男が生まれた年でもあります。が、またまたひよんなことからハローワークで出会った派遣会社を通じ、都市計画コンサルティング会社にて仕事をすることになりました。いまでは縮小し始めている派遣会社が当時は雨後の筍のごとく生まれていました。

リゾート法という法律ができたあとで、金太郎飴のようなプランづくりに、末端の業務員の一人として伊豆地域の現地調査など行った思い出があります（結局そのプランは実現していません）。

その後、派遣社員を卒業し、個人事務所などを経て、ささやかながら個人事業という形で設計事務所の下請けをしていました。

農水省系列の財団法人が元請の中山間地域の活性化プランの作成というのが主な仕事でした。ウルグアイラウンドの農産物輸入の自由化に伴う農業地域支援という施策背景があったように思います。

ところで、小生、大学での専攻は農芸化学だったのですが、学生時代の勉学に勤しんだ時間の少なさはさておき、上記の仕事は、ほとんど専攻が役に立ってないですね（苦笑）。



大久保利通公碑（農学部）

さてさて、もう一度時間を遡ります。1983年。留年濃厚の予想を覆し、無事卒業。当時は東京タワーのすぐ近くにオフィスを構える、とある製薬会社に就職をしました。これも、ひょんなことから、だった記憶があります。当時、この会社は新卒社員を採用し始めたばかりで、我々はその2期生ということでした。この時の社長が昨年ロンドンオリンピックで日本選手団最年長出場の法華津さんでした。入社1年目は東大や医歯大のがんセンターなどを担当し、細胞性免疫系など血液系の試薬の営業をしていました。この時が、唯一、大学での勉強が役に立った?のかもしれません。

大学を卒業して30年。人生に「たら・れば」はないのですが、新卒入社し勤続30年だったらどうなっていたでしょう? (ちなみに、5年前にリストラを実施済みなのでリストラ対象筆頭か) でも夫々の在職時の方といまでも付合いがあるのは、幸せのひとつと感じます。

30年前卒業した、おそらく自分の人生に大きな影響を与えた筈の、埃漂う4人部屋の寮寮は、高架となった中央線からも明るい黄色が目を引く個室寮に変身してしまい、やはり時間を感じます。30年はあっという間。30年先?考えるのはやめちよきます。

## よもやま話 2



【薄寒桜】  
 め、樹木の診断を山口県樹木医会に依頼した。ご指摘に添い樹木周辺の土壌に有機物を施用して、膨潤化と周辺に竹柵を設置した後、樹勢が回復し多くの花を来訪者が楽しまれています。次に、市内で最も早咲きの彼岸桜がJR常盤駅の構内に植栽されていますが、近年、枝枯れにより樹勢が弱まる傾向になる対策として、昨年からクローン苗で子孫を残す保存策を会長の私と樹木医の皆さんと自然保護の諸活動を瀬戸内で行っています。

500年に達し、日本最古と考えられている。この古木の保存を図るため、調査・研究・助言等を行っています。  
 同市楠地域の教善寺のサザンカは市指定の天然記念物で推定樹齢が約500年に達し、日本最古と考えられている。この古木の保存を図るため、調査・研究・助言等を行っています。

宇部市の近辺者による「樹の生命を大事にする会」の発足で、古木、銘木および遺伝資源など樹木の保存を図るため、調査・研究・助言等を行っています。  
 宇部市の近辺者による「樹の生命を大事にする会」の発足で、古木、銘木および遺伝資源など樹木の保存を図るため、調査・研究・助言等を行っています。

桜は日本と米国の友好と親善の架け橋として、東京市長 尾崎行雄様の提案により、明治43年に農商務省試験場園芸部興津に桜の苗木の育成について要請された。同場は染井吉野、薄寒桜、里桜、御衣黄など12種類で総数6040株を明治45年(1912年)に米国に贈呈しました。  
 桜は毎春、ワシントンのポトマック河畔とホワイトハウスの庭園ならびにニューヨークのセントラルパークにおいて両国の絆として咲く風景を皆様方はご存じのことと思います。  
 平成24年(2012年)、桜を米国に贈呈して「100周年」の祝年事があり、農林水産省独立法人、果樹研究所柑橘興津研究拠点に原木の「薄寒桜」1株が現存し、その枝を山口県大島郡周防大島町東安下庄で柑橘類の育種家で山本弘三様が譲り受けられた。この度、クローン技術で増殖された貴重な株を天皇・皇后陛下のご臨席の式典・第63回全国植樹祭が山口市阿智須の「きらら博記念公園」において、5月27日に開催された行事の折り、苗木を山口市阿智須総合支所、宇部市常盤公園、および筆者が同窓会会長を務めます山口県立宇部西高等学校等の各所に、記念植樹をいたしました。同省・元園芸試験場の親睦会の桜会員であります小生は感激の至りです。

### 日米親善に薄寒桜の由来

武永 順次 (元教官)

## VI. 世界につなぐ

### 1. 「江蘇省（常州）奮闘記」

河村 吾郎（織高 S55）

私は平成17年10月より1年半の間、中国の常州市（江蘇省）に所長として駐在していました。仕事の詳細は利害関係のある方もいらっしゃると思います、生活の方に重点を置いて話を進めることにします。

常州市は南京市の隣に位置し、夏は40℃近くまで気温が上がり、逆に冬は-10℃位まで気温が下がります。盆地を想像してもらえばいいでしょう。その反面、湿地帯（揚子江デルタ地帯）でもあるせいか、湿度が高い為、冬はいやらしい寒さになります。ですから常州で「蠍」（さそり）を見ることはありません。「蠍」は湿度の高い所では生きられないそうです。

その反面、「ザリガニ」の店が常州には結構あり、店から逃げた「ザリガニ」が街を歩いていることもあるそうです。因みに中国人は「蠍」、「ザリガニ」等の甲殻類が大好きだそうです。

朝は早くから果物店等の個人商店は営業しています。夏の風物詩であるスイカは一年中売られています。スイカ好きの人にはたまらないでしょう。

買い物は地元で一番大きいショッピングセンターで買い物をしますが、上海等の大きな都市とは違い、なかなか日本の物が手に入りません（今はある程度改善されたようです）。米など、一番の高級米（一番値段の高いお米）はなんと「タイ

米」でした。関税の関係かもしれませんが、これにはびっくりです。

住まいは俗に言う「外人マンション」と言われる大きな所に住んでいました。守衛がいつも朝晩問わずパトロールしてくれるので、セキュリティはかなり良かったです。ただ、水道工事等の時は直前に工事の掲示がされるので、大変困りました。しかも、時間も日本に比べると考えられないほど、長い時間断水が続きます。TVは原則日本の放送は見れない事になっていますが、住んでいたマンションともう一つのマンションは例外的にBSを見られる許可が市からおりていたので助かりました。

変わったことと言えば、仕事の関係先で不幸があり、告別式に参列した時の事です。待合室と思われる所で煙草を吸っている人たちが群がっていましたが、なんとそこに御遺体があり、その前に受付がありそこで香典を渡すと、受付の人がケーキの入った箱を地べたに置きます。香典を渡した人はそのケーキの入った箱を地べたから拾って持って帰るというシステムですが、地方によってやり方が全く違うそうです。

また春節の時に一番最初に寺の鐘を鳴らすにはお金を払う必要がありますが、一番多くのお金を払った人が鐘を打つ権利があるそうです。毎年同じ人が鐘を打っていると聞いています。

最後におすすめの食べ物を紹介しましょう。「南京ダック」をおすすめします。「南京ダック」は「北京ダック」のように脂っこくなく、非常に日本人には食べやすく「美味」です。一度試してみるだけの価値はあると思います。

## 2. 米国ペンシルベニア州立大学滞在記

有馬 卓司 (工博電 H15)

平成24年5月末～同年12月末までの約7ヵ月間、機会を得て米国ペンシルベニア州立大学に訪問研究員として滞在したので紹介する。滞在期間中の仕事については他所で紹介しているので、ここでは仕事以外の事について紹介する。

ペンシルベニア州には、鉄鋼業で有名なピッツバーグ、アメリカ建国の地フィラデルフィアの二つの有名な都市があるが、州都は意外に知られていない。地理的に州の中心付近にあるハリスバーグという比較的小さな街が州都である。これを知っている人はペンシルベニアの人か地理通であろう。

肝心のペンシルベニア州立大学は、全米最大都市のニューヨークからほぼ直線的に西へ車で4時間程のところに位置する。州都ハリスバーグからは北へ車で2時間ほどである。街の名前はステートカレッジと言い、名前通り明らかな学園都市である。

アメリカというか、海外で生活するのは初めての経験である。こちらのアパートは、電気・水道・CATV・インターネットが家賃に含まれているのが一般的である。アパートを見つける苦労は経験した人にしか分からないと思うので割愛する。一言感想を言うなら、本当に大変だった。ステートカレッジは、世界中から留学生が集まっているので非ネイティブが多く、言語での苦労はほとんどなかった。食事はステーキ中心の生活を7ヵ月間送る事になる。

アメリカの州立大学では受講する科目ごとにそれなりのお金を払わないといけない。

また、学科のつながりが強く毎週、金曜日の夕方に学科主催のドーナツパーティーが開催され、学生と教員がワイワイと雑談し関係を広げている。学

内は、中国人、インド人、韓国人が非常に多く、街の何処にいても、彼らが目につく。残念ながら学内で日本人に会った事は無かった。中国人研究者に日本人を見かけないと話したら、日本は先進国だから、今さらアメリカに来る必要がないのでは、と言われた。

大学が誇る物の一つがアメリカンフットボールだ。大学は全米で第2位の収容人数を誇るビーバースタジアムを有し、ここで大学のチームの試合が行われる。スタジアムの収容人数は10万人以上で街の人口の2倍程だ。試合が行われる週末はフットボールウィークエンドと呼ばれ、街は独特の雰囲気になる。試合を観戦したが、劇的な勝利をあげ、街が一つになったようだった。滞在した7ヶ月はあっという間に過ぎ、少しの成果と多くの友人というかけがいの無い物を得る事が出来た。私のアパートは年間契約のため、残りの契約期間を第三者に借りてもらわないといけない。インターネットで広告を出すなり多くの問い合わせが来て、すぐに借り手を見つけることが出来た。誰もがアパートを探すので苦労している事がよく分かった。ステートカレッジ最終夜は、よく通ったバーでビールとマルガリータを飲んで終わった。



ペンシルベニア州立大学の本部建物  
Old mainと呼ばれ大学のシンボルになっている

謝辞 海外派遣という貴重な機会を提供して頂いた日本学術振興会ならびに農工大学に感謝する次第である。

(東京農工大学 准教授)

### 3. 仕事場は七つの海

樋口 和久 (機シス院 H20)

皆様、初めまして、私は2008年に機械システム工学専攻を修了しました。学部では亀田正治教授、大学院では新井紀夫教授、(財)鉄道総研の鈴木昌弘客員准教授のご指導の下、流体力学の研究をしていました。現在は、日本郵船㈱に勤務しており、農工大からは恐らく初めてではないかと思われませんが、航海士として外航船に乗務しています。知人に仕事の事について尋ねられて、船に乗っている、なんて答えると、真っ先に返ってくる反応は、「え!?まぐろ漁船?」がほとんどです... 島国でありながら船乗りが身近にいないのは残念に思います。少しでも皆様にご理解頂けたらと思い、簡単に私の仕事を紹介させていただきます。

まぐろ漁船で一攫千金にも憧れますが、私の任務はお客様の荷物を安全に目的地までお届けすることです。航空機ならあっという間ですが、重量ベースで見ると貨物輸送の約98%は海上輸送で担われており、私たちの生活には必要不可欠です。貨物といっても様々あります。私は入社以来、LNG船(液化天然ガス運搬船)、コンテナ船、多目的重量物船に乗船しました。LNG船では、日本のガス会社及び電力会社向けに、インドネシア、サハリンから一隻当り約120,000m<sup>3</sup>の液化天然ガスを運んでいました。コンテナ船では、夢のようなハワイ-中南米航路やパナマ運河を抜けてカリブ海クルーズのアジア-北米東岸航路に乗船し、一般的な雑貨、食品、その他コンテナに入るものは何でも運んでいました。そして今乗船しているのは、多目的重量物船(通称:在来貨物船)で、日本から中東向けに一基、数百トンのプラント部材や鉄鋼製品を輸送しています。中東からの

復路では船倉が空になりますので、途中インドへ寄港し家畜飼料の原料となる大豆粕を積み日本で揚げるというように効率的に運航しています。海上では極めて厳しい環境に曝されます。荒天時には、大型船といえども左右に40度ずつローリングすることもあります。また、最近は減少傾向にあるものの、海賊も非常に脅威となっています。もちろん辛い事だけではありません。綺麗な星空や景色、イルカやクジラとの並走、氷海航海といった陸上では味わうことのできない感動を体験することができますし、旅行ではまず行かないような世界中の港に寄港し、上陸を楽しむこともできます。

海上勤務中は、一度乗船すると約6ヶ月は勤務が続き、約3ヶ月の纏った休暇となります。今後数年の内には陸上勤務となる予定で、海上での経験を陸上からの運航支援という形で活かすというキャリアプランになっています。さらに将来は船長にまでなることができます。どの世界も現場あってこそだと思いますので、今は貴重な経験をさせて頂いていると感じています。

精神的にも体力的にも厳しいですが、それ以上にやりがいは十分にあります。

是非、農工大から新たに航海士、機関士が誕生



パナマ運河通峡中のコンテナ船の船橋から

することを強く望んでおります。これから本船は日本での揚積の後、太平洋を横断し、北中米、パナマ運河経由で欧州まで行くことになりました。今後も安全運航に努め、世界中に価値のある物を

運び、世界に貢献したいと思っております。最後になりましたが、農工大の益々のご発展、また、教職員並びに在学生・同窓生の皆様のご活躍を祈念いたします。

## 一言もの申す ②

### サークル顧問のつぶやき

渡辺 元 (獣医 S54)

馬術部、ミニホースの会、ビオトープの会、人と動物をつなぐ会「のたっと」、野生動物研究会、グリークラブ。私が顧問を務めるサークル、部活、農ゼミを就任が新しい順に並べてみました。実に6つもの学生の課外活動の顧問を兼務しています。

「馬術部」は歴史が古く、明治7年にその源があり、全国学生総合馬術大会などで数々の戦績を残しております。現在は部員集めに苦戦しておりますが、女子部員も多く活躍しており、農工大の看板部活の一つです。

「ミニホースの会」は、故大野乾先生の愛馬、雄のアメリカン・ミニチュアホースのアップルサイダーが2003年に寄贈されたのをきっかけに発足し、社会貢献活動を行っているサークルです。ウマたちは大学のマスコットの役割を果たし、多くの市民の方に親しまれています。

「ビオトープの会」は地域生態システム学科の学生が中心になって、学内に自然を観察し、池を作って生き物呼び寄せようという活動をしています。将来は府中市の公園や近隣の小学校とも連携できたらよいと考えています。

「のたっと」は、2000年に導入された「基礎ゼミ」で取り上げた学校飼育動物の問題にゼミ修了後も取り組んでいこうという学生の集まりがもとになり発足しました。今ではウサギなどを飼育し、近隣の小学校や保育園にヤギとともに出張授業(写真)に行ったり、大学のキャンパス内に子供たちを招いたりして、熱心に活動しています。

「野生動物研究会」は1995年発足した日本野生動物医学会の学生会農工大学支部として発足しました。リハビリケージプロジェクト(RCP、保護された野鳥のリハビリを行う)が、東京都の鳥獣保護員の方やNPOとの協力のもと行われています。

私は学生時代グリークラブに所属しておりました。グリークラブでは農工両学部の学生と知り合うことができました。更に、女子美術大学と混声合唱団を作っております。専門が異なり考え方も感性も様々な人々との交流や、部活動を通じて社会を体験することは、コミュニケーション・スキルを養う上で極めて有効だったと思います。

最近の若者は指示待ちが多いと言われ、農工大学の学生も確かに授業ではあまり質問にも来ません。研究室のセミナーでも熱心な議論にはなりません。しかしながら課外活動にはかなり積極的に参加しています。昨年行われた「第7回学生生活実態調査」では農学部学生の93%がサークル活動に参加しているか、したことがある、と答えています。私自身学生時代にお世話になったサークル活動に恩返しをするつもりで、顧問を引き受けています。

サークルの中には顧問のなり手がなくて困っているものもあります。教員にとっては雑用が増えるだけで、事故などの問題が起きれば、対応に追われることになり、現状ではなり手が少ないのも致し方ありません。同窓会や教育研究振興財団で支援を考慮いただけると、もっとなり手も増えるのではないかと思います。(東京農工大学教授)



## VII. 趣味を楽しむ

### 1. 「北斎に消された男」と 「ダーウィンに消された男」

藪田 順一 (織工 S37)

No84号で紹介されていました「隈取絵師」平茂寛 著（第3回朝日時代小説大賞受賞）を拝読、史実をベースに展開するストーリーを堪能しました。現役の農業技術者がこれだけの時代小説を書かれたことに敬服しますとともに、続く作品を期待します。

読後、いろいろと連想が湧きました。

巻末の参考文献のひとつに「江戸の工夫者・楳形恵齋―北斎に消された男」があります。

恵齋（1764～1824）享年61歳、と北斎（1760～1849）享年90歳 はほぼ同時代といえます。ただ北斎の方が一世代長生きをしています。

恵齋の「日本図絵」や「江戸一目図」の鳥瞰図は北斎の鳥瞰図「東海道名所一覧」より早く作成されていますし、「北斎漫画」も恵齋一連の「略画式」より後で刊行されています。こんなことから恵齋は圧倒的な仕事量の北斎の影に隠れて、あたかも「北斎に消された男」になったのでしょうか。

なお、「隈取絵師」に出てきます恵齋の傑作、「近世職人尽絵詞」は東京国立博物館のサイトから全巻が閲覧できます。

「消された男」で思い出しますのは「ダーウィンに消された男」。

こちらは1983年にやはり朝日新聞社から邦訳出版されました。ハードカバーの帯に、日高 敏隆先生が紹介文を書いておられたこと、共訳者の一人が楓寮におられた羽田 節子さんだったこともあり、購入、一読いたしました。「種の起源」は挫折しましたが、こちらは一気に読ませます。

刊行直後も話題になり、その後、朝日選書に入り現在も続いていますので、読まれた方も多いと思います。こちらの「消された男」はアルフレッド・R・ウォーレス、生物の分布境界線・ウォーレス線で名を残していますが、今やこの本のおかげでダーウィンと言えば彼を思い出す人も多いのではないのでしょうか。上記「江戸の工夫者」の副題もこの題名が頭にあったのかもしれませんが。

日高 先生と言えば、農工大に赴任された1958年が私たちの入学の年で、先生の動物学は、一度も欠かさず受講しました。動物実験の鶏の解剖にも同席され、解剖後一緒にその肉ですき焼きに興じたりもされた魅力ある先生でした。

1974年頃、牛島 忠広 先生を訪ねたおり、日高先生の話もでしたが、先生は農工大を去ったあとでした。牛島 先生はこのあと、心臓発作で亡くなられ夭逝を悼みます。



もう一度、鳥瞰の話に戻ります。

- ・わたつ海の かざしにさせる 白妙の波もて  
ゆへる 淡路島山 古今集（詠み人知らず）
- ・稲妻や 浪もてゆえる 秋津島 蕪村

鳥瞰の視点は、Google earth → 北斎 → 恵斉 → 蕪村 → 古今集 と遡ります。調べれば更に遡ることでしょう。

## 2. 吉田貞次郎と松浦武四郎

吉田 讓（獣医 S45）

私は大の北海道ファンで毎年北海道をバイクで旅行しています。広大な大地と真っ直ぐな道、そして美味しい数々の食べ物それに加えて人情味あふれる人々。

ということで今回は、三重県と北海道に関係する吉田貞次郎と松浦武四郎の話です。

この二人に共通することは三重県生まれと北海道で活躍したということです。吉田貞次郎は20世紀前半の人で松浦武四郎は19世紀中期の人で二人が遭遇することはなかったと思います。

まず、吉田貞次郎ですが、明治18（1885）年三重県津市生まれ、明治33（1900）年16才の時に両親と共に上富良野村三重団体へと移住しました。大正8（1919）年には村長に選任され4期16年間村の発展に尽力しました。これだけならどこにでもあるような話ですが、違うことは村長在任中に大災害が発生しその対応に優れたリーダーシップを発揮したことです。それは、大正15（1926）年5月24日に発生した十勝岳の大噴火です。村は泥流に埋まり、144人の尊い命と村のほとんどである850ヘクタール以上の田畑が被害を受け、壊滅的な被害を受けました。

この被害を受けた後、復興するか否かの議論が村を二分する中、吉田貞次郎村長の強い復興の決意が、災害復旧へとつながり、わずか数年で田畑をよみがえらせたのでした。これによって、上富良野の地は復活し、その後、下富良野村（現富良野市）、中富良野町に分村し今日があるのです。

貞次郎がいなかったら富良野市のラベンダー畑もなかったのかも知れないし、富良野地域の今日の発展はなかったかもしれません。

この時の十勝岳大噴火については、三浦綾子さんの小説「泥流地帯」に詳しく書かれているので興味のある方は是非一読ください。

さて二人目の松浦武四郎ですが、この人は「北海道」の名付け親として知られています。1818年三重県松阪市生まれ。本草学を学び、早くから諸国を巡ったとのこと。1844年27才の時に蝦夷地探検に出発し、その探査は択捉島や樺太にまで及びました。1855年に「東西蝦夷山川地理取調図」を出版しました。明治2年（1869年）には開拓判官となり、蝦夷地を「北海道」と命名したほかアイヌ語の地名をもとに国名・郡名を選定しました。

いわゆる今でいう探検家ですが、北海道中を歩き回っていることから北海道各地に彼の碑があります。紹介すると一番有名なのが長沼町にある道の駅「マオイの丘公園」にある全身像の碑です。その他に洞爺村、京極町、小平町道の駅「おびら鯨番屋」、豊富町稚咲内（オロロンライン沿い）、岩見沢市北村、新十津川町、上富良野町、厚真町、音更町、仁木町、岩内町、神恵内村、天塩町、羅臼町、厚岸町、釧路市幣舞公園、斜里町…。これでも半分も紹介していません。どこへ行っても松浦武四郎の碑はあるという感じで時間があれば碑巡りをしても面白いかも。それほど全道をくまなく歩いているということですね。これだけでも尊敬に値しますね。

三重県と北海道に関係ある人物二人を紹介しま

した。北海道在住の方はもちろんですが、それ以外の方でも北海道を旅行するときの参考にしていただければと思います。



上富良野町の吉田貞次郎記念館（実際の家屋を保存）

### 3. 私とラグビー

鈴木 大介（織工 S41）

ラグビーとの出会いは親父が、ラグビーマンだったことが根本にある。小中学時代、映画を見に行くとのことで、一緒に行くと最初はラグビーを見て、それから映画であった。ただ、その当時、ラグビーには興味がなかった。その後、農工大学のとき、親父が学生時代に香港で試合をしたことを聞き、臨時コーチとして来てもらったことがある。

次に高校時代のとき、体育の先生がラグビー選手だったので、ラグビーの全校のクラス対抗戦があり、一年生の我がクラスが優勝し、三年生の選抜にも勝った。しかし、ジャージーを教室の達磨ストーブで乾燥したとき、臭いが強烈で、特に女の先生から嫌がられ、それ以降、ラグビーのクラス対抗戦は中止となった。その後、小生は卓球部に所属し、駅伝選手や高校のスキー合宿の講師として活動。三年生のとき、ラグビー部員が病気となり、急遽、小生が代わりに出場。対戦相手が私立の有名校だったが、試合は接戦していた。しか

し、私のタックルミスで負けたことが、大学でラグビー部に入部したきっかけである。

大学三年生の時、三織維大学の体育大会が農工大学で実施され、体育部のリーダーとして教授会に出席して企画に参加。その時、グラウンドに芝生が植えられ、草取りに汗を流したことが懐かしく思い出される。

その後、昭和40年不況で就職できず、まだ当校に大学院が設立できてなく、東工大の大学院に入学。

勝手にコーチとして、1回／週の練習と合宿に参加して後輩をしごいたかも？

このために、S41年～46年卒のOB会が2回／年の飲み会としてつづいていると思っています。

会社に入社して、初めの配属先にラグビー部があり先輩も居て、すぐに入部。その年の社会人四国大会の決勝戦で善通寺自衛隊に終了直前に同点にされ、じゃんけん負けで、正月の秩父宮ラグビーでの全国大会に出場できなかったことが、悔やまれる。

その後、転勤で紡績工場勤務となり、ラグビーをする機会がなく、テニスに転向。

現在では藤沢市に住み、ケーブルテレビで世界や高校、大学、トップリーグ等を見ており、またシーズンには秩父宮ラグビー場に通っています。時には家内と一緒にいきますが、ビール売りの女の子と挨拶しているのを見て、家内がびっくりしていました。

今では、ラグビーの基礎体力のお陰で、家内と二人で奥様方のテニスのコーチをして楽しんでいます。



## 4. そこに鐵路のある限り

蘇原 佳威 (電気 S58)

子供の頃から鐵道が大好きで、よく線路端で遊んでいたものでした。そんな自他共に認める筋金入りの鐵ヲタである私が、日本国内の鐵道に全部乗ってやろうと思いついたのが東京農工大学在学中だった1980年(昭和55年)の夏で、まだ“いい旅チャレンジ20,000km”(これも既に死語か)なんてキャンペーンが始まる以前の事です。もちろんどこにも全線に乗ったという証拠はありません。あくまでも自己満足の世界です。

鐵道と言っても国土交通省管轄の公共交通機関には様々な種類があり、独自の判断基準で「鐵のレールの上を鐵の車輪で自力走行し、かつ旅客営業中のもの」と定義しました。したがって、ケーブルカー・ロープウェイ・リフトなどの鋼索道やゴムタイヤで走るモノレール・新交通システムなどは対象から外しました。そうは言っても除外されたこれらの乗り物も鐵道の仲間であることに変わりはありませんから、近くまで来て無視することなど出来ず、その都度、足を印しています。ただし、あくまでも完乗の対象は上記の定義に拘っているのです、利用しても参考記録に留めています。

また、いわゆる二重戸籍区間については、同じ経営母体が運営している場合に限り、重複計上しないこととしました(新幹線を除く)。以上のほか、各社間の渡り線(JR東日本と東武の栗橋駅構内などがその代表例)や線路改良などによる付替区間なども乗る対象としていますが、わざわざ出掛ける例は少なく、何かのついでに乗っているというスタンスで、特に前者は乗車キロに含めていません。それと、テーマパークや遊園地、ゴルフ場やホテル・旅館等にある特殊な乗り物は、気

が付けば乗るように努めていますが、きりがないので全て対象外としました。

本定義に従い、思い立ってから日本国有鐵道を分割民営化前に全線完乗するまでまる6年、1989年(平成元年)3月の民営鐵道や公営交通を含めた国内の鐵道全線完乗達成までに足かけ8年半を要しました。言ってみれば、青春の全てを鐵道にかけたと言っても過言ではありません。お陰で、切符のルールや地名・駅名には詳しくなりました。



記録を顧みると、2013年(平成25年)9月末現在で全国に2万7千km弱ある鐵道の乗車率は100%となっており、日本国内に未乗線は存在しません。新幹線や地下鐵の延伸などで華々しく新線が開業している一方、乗車後に廃止となった路線が、路面電車や北海道および九州のローカル線を中心に3,100kmを超えており、日本列島も随分寂しくなったなあと思うのが実感です。

いずれ何かの機会にまとめようと思っていたのですが、情報発信アイテムとしてのインターネットが瞬く間に普及し、自分のホームページが持てる素晴らしい時代が到来したので、今までの軌跡を克明に残すことにしたのが、今から17年前の1997年(平成9年)の事です。なお、ネット上では「たぶれっと駅長」のハンドル名で活動していますので、ここまで読んでもしご興味を持たれた場合は検索してみてください。

さて、日本の鐵道を完乗した後、喜んだのも東

の間、今度は新線が開業するたびにタイトル防衛と言うタイトル保持者だけに与えられた使命を果たすべく、長い道のりが待ち構えていたのでした。しかし、当面の目標を見失ってしまったことは否めず、その穴埋め？をするため、完乗した翌年、20代最後の春となった1990年（平成2年）3月に結婚しました。新婚旅行の行き先はヨーロッパで、初めての海外デビューでもあり、久々に胸が高鳴ったのを今でも覚えています。

しかもハネムーン向けのパッケージツアーではなく、いきなりハードルの高い全行程フリープランにしたので、出発前はとても不安でした。しかし、行ってみれば何とかなるもので、結局この時はユーレイルセイバーパスを9日間屈指して、5カ国（フランス・イタリア・スイス・オーストリア・西ドイツ）約3,000 kmの鐵道に乗り回り、新婦そっちのけで夢中になったものでした。

これをきっかけに海外の鐵道に味を占めたこともあり、新線開業以外、日本に乘るものがなくなったことを理由に、その後鐵道旅行の可能な国へ毎年出掛けるようになりました。昨年は念願だったロシアのシベリア鐵道約9,300km、車中7泊8日の旅を満喫し、バイカル湖畔ではオムリ料理に舌鼓を打ったほか、同年秋に訪れたミャンマーを加え、訪問国数は17ヶ国に達しました。



2013/6/21 オムスク駅に停車中のシベリア鐵道69列車

最近は廃線跡巡りや、時刻表地図にも載っていないようなあやしい乗り物にも目覚めました。特に一昨年はまだ残暑が厳しい時季に、富山県にある二つの特殊専用鐵道（国土交通省管轄の立山砂防軌道と関西電力（株）管轄の上部専用鐵道）へ体験乗車に出掛けました。これらは一般公開していない専用鐵道だけに乘る機会がなく、ずっと気になっていました。ところが外れ続けていた抽選にW当選し、受験生を抱える身でありながらも家族で参加する機会が与えられたのです。前半の立山砂防軌道は樺平の18段連続スイッチバックが印象に残り、後半の高熱隧道を行くトロッコはインクラインを含め4つもの乗り物を乗り継ぐ過酷なルートで、その大自然を克服した当時の技術者魂に感動を覚えました。ここ数年、海外ばかりに目が向きがちでしたが、日本国内もまだまだ捨てたものではないと改めて認識した次第です。



2012/8/22 立山砂防軌道水谷連絡所にて

旅のスタイルも時代と共に変わりました。ひたすら乗り潰しばかりに勤しんでいた1980年代は、貧乏だったこともあり、無人駅を中心とした駅ネなど野宿を基本とする修行のような旅でした。しかし、さすがに体力が衰えだした30代以降は、経済的に余裕が出てきたこともあり、鐵道沿線から

遠く離れた秘湯を訪ねたり、ご当地B級グルメを探求する普通の観光旅行へ移行しています。

話が長くなりましたが、農工大を卒業してから昨年でちょうど30周年を迎え、定年という名のゴールが見えてきました。年金・再雇用問題など先行きは不透明ですが、セカンドステージを見据えながら新たなチャレンジ目標を定め、これをご覧になった皆様とどこかでお会い出来る日を楽しみに、今後も鐵分補給に鋭意努めて参ります。

## 5. サイクルツーリズム

大友 淳也 (環・資 H7)

みなさん、こんにちは。私は平成7年卒で現在、北海道の長沼町役場に勤務しております。今回、投稿の機会を与えて頂きましたので、北海道観光における最近の話題を少し書かせて頂きます。観光地としての北海道の魅力は、食、広大な田園景観、豊かな自然環境などありますが、昨今それらを売りにしたサイクルツーリズムがちょっとしたブームとなっています。

ここでいうサイクルツーリズムとは、例えば飛行機で北海道に入り、札幌を宿泊先として車でフィールド（任意のコース）まで行き、サイクリングを楽しんだ後は車で宿泊先まで戻るといったスタイルであります。ガイドツアーを主催する法人が札幌には複数あり、既に香港、台湾等、東アジア地域からの自転車愛好家達が北海道を訪れており、大変な好評を博している状況です。国の「第7期北海道総合開発計画（平成20～29年度）中間点検中間報告」では更なる重点化を図る施策として「インバウンド観光の振興」を挙げているところであり、昨年夏には、サイクルツーリズム

北海道推進連絡会が北海道商工会議所連合会を中心に結成され、サイクリングを北海道の新たな観光資源として、道外・国外からの観光客誘致を目指す取り組みが官民あげて実施されてきているところです。

一般的に自転車によるツーリングは、私も農工大在学中、夏休みに友人と北海道内を自転車旅行をしたことがあります。全行程を自転車（晴海～釧路はフェリー）、宿泊はテント、食事は自炊といったスタイルですので、相当量の荷物を積んで、連日（5泊6日）長距離走行をするという、かなりの体力勝負でありました。

その点、サイクルツーリズムなら自転車はレンタル、体力に応じたコース選択、食事はお店、宿泊はホテルですので、ゴルフ・スキー感覚でお手軽にサイクリングを楽しめるかと思います。

長沼町は北海道の中央、石狩平野の南東部に位置する農業を基幹産業とする小さな町ですが、最近、長沼町においてもサイクリスト達が多く見られるようになってきました。ツアー会社によると、長沼町は道都札幌から車で1時間、北海道の空の玄関口である新千歳空港まで車で30分の好立地であり、広大な田園風景と馬追（まおい）丘陵から石狩平野の眺望が人気を呼んでいるとのこと。

長沼町は年間4,000人の道外修学旅行生を受け入れているグリーンツーリズム先進地ですが、第2の体験型ツーリズムとして定着していくことを期待しているところです。

皆様も是非、サイクルツーリズムで北海道、そして長沼町を訪れてみてください。心よりお待ちしております。



## 6. 世界最大のメガシティ東京を駆け抜ける

白井 久一（物生院 H12）

2007年から始まった東京マラソンは、今回で7回目を迎え、私は第1回から申込みを続けやっ  
と当選（申込人数303,450人、抽選倍率は約10.3倍）。東京マラソンは、東京都庁から臨海副都心にある東京ビッグサイトまでのコースで、過去最多の36,676人の市民ランナーらが参加しました（制限時間7時間）。一般参加費1万円ですが、どうしても走りたい人の為にチャリティランナーというものがあり、10万円以上の寄付をすることで抽選なしに走ることができます。ちなみに、チャリティランナーのゼッケンはゴールドです。スタート前の状況は気温4.6度でしたが、陽が出ていたので暖かく感じられました。また、スタート前のトイレは十分に用意されていましたが、それでも長蛇の列でした。

私は当選してから準備を始めました。大学では



東京タワー近くを奮闘中

オリエンテーリング部に所属し、走ることは好きで、毎年、谷川真理ハーフマラソン（東京都荒川）に参加しています。しかし、フルマラソンは富士山に登るのとは勝手が違いますので、まずは、フィットネスクラブに通い、身体全体の筋力アップに努め、半年で5%の減量をして本番に挑みました。さらに、トレーニングだけでは不安があったので、ひざ用のサポーター（CW-X）を新たに購入しました。このおかげで膝の痛みは最小限に抑えられ、長距離でのありがたみを実感。もし、予算に余裕があれば、CW-Xジェネレーターモデル・ロングスポーツタイツをお勧めします。大会前日のイベント会場で試着したところ、これを身に着けることで長距離の筋肉疲労を緩和できるだろうと実感できましたが、スポーツタイツを今まで使ったことがなかったので、今回は断念。ほとんど値引きされない繊維の技術が結集されたこの商品は、スポーツ初心者の怪我を抑える大きな支えになることでしょう。

私の完走タイムは5:28。それに対して、猫ひろしさん2:30、日本マクドナルド社長の原田さん4:12。次回走るチャンスがあればタイムは4時間を切りたいものです。今回の男性1~3位はケニア人で占め、優勝タイムは2:06。女性優勝タイムは、エチオピア人の2:25でした。東京マラソンでは男女各10位以内には賞金が出ます。1位は800万円…10位は10万円。

友人や家族が各ポイントに応援に駆け付けてくれ、いい緊張感の中、気を抜く事なく完走する心の支えとなりました。スタートが遅い区分でしたので、後半、食糧のサービスが無くなる心配がありました。十分に用意してあり助かりました。大会スタッフの皆さんに感謝です。普段、走ることができない都心の名所を走る爽快さは最高です。これは体験した人でないとわかりません。

東京マラソンの申し込みは、毎年8月にWEB

からエントリーでき、当選通知は9月下旬に来ます。皆さんも挑戦してみても如何でしょうか。

(オリエンテーリング部)

## 7. ロードバイクでしまなみ縦走

濱田 浩 (機シス院 H22)

『社会人は刺激が少ない!』

社会人になるとなかなかバカなことはできないし、しない。でも人生パニックしてる時が一番楽しいのです。

そして、私は刺激も求めてロードバイクを買いました。

購入した当初は「やってしまった」という後悔もありましたが、いまではやみつきです。

ロードバイクを買って半年で140km走ってみた!

私の地元は愛媛県、現在はその中でも東予と呼ばれる地域に住んでいます。

なかでも複数の島を橋でつないだ、しまなみ海道はサイクリングの聖地、一度は走ってみたいあこがれの地。そこでスタンプラリーが開かれる、これはやるっきゃナイトと参加を決意。

しかしこのとき、私は一日の走行距離はMax.50kmほど、一人では不安なので、私をこの道(ロード)に引きずり込んだ友人Eを招集しました。

参加を決意してからの私は仕事の合間に練習に励むことはできず、完全にノープランのノーガード戦法、ぶっつけ本番。

そんな中、私と友人Eのスタンプラリーはスタートしたのです。

『しまなみは初心者に親切』

しまなみ海道は愛媛県今治市から広島県尾道市まで片道70km続くのですが、なんの下調べ

がなくとも十分走ることができます。サイクリングする人たちのために道路の白線の横に、青い線が引かれているからです。これは推奨サイクリングロードというもので、そのラインをたどっていれば、迷わずしまなみ海道を走りきることができます。

『今治から尾道そして今治へ』

スタンプラリーは愛媛県今治からスタート、各橋や島に設置されているチェックポイントを通過、全て推奨ロードなので道に迷う心配はありません。

スタート直後、さっそくのループ橋で出足をくじかれる。

しまなみは橋を渡るわけですが、橋はかなり高度が高いため各橋にかなりの坂を上っていくことに、しかし景色は絶景、そして坂を上れば下り坂、なんとか友人Eに食らいついて走ります。

ほぼ無心、日没までにはしまなみを往復する計画、自分のスキルすりきり一杯の日程です。チェックポイントこなしながら昼過ぎに尾道に到着。

片道でスタンプラリーのスタンプはすべて押しているので完走賞をいただくことができます。これが罠でした。伯方の塩、今治タオルという重い、かさばるアイテムを背負い復路をいくことに。

そして、復路完走直前、わずか3km手前で人生初のハンガーノックの洗礼を浴びたのです。急に



しまなみ海道を完走

動かなくなる足、気分が悪くなる体、ふらつく視界、それでもなんとか復路も完走。完走賞のタオルとともに記念撮影しました。

走り切れた解放感と達成感、バカやってる自分、そして気軽に安全に適度に自分を追い込める

自転車は人生のスパイスにお勧めです。

みなさんもぜひ刺激ある楽しみを見つけてください。

人生、パニクってる時が楽しいんですよ。

## 一言での申す ③

### 震災から2年、今、前を向いて

根本 文宏 (植防S61)

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から丸2年が経過しました。

この間、福島県に対してそれぞれの立場からご支援いただいた多くの方々に感謝申し上げます。

また、現在も北は北海道から南は沖縄県まで、200名を超える県職員の方々が、自治法派遣職員として、福島県の復興支援に駆けつけて、様々な業務をお手伝いいただいております。本当にありがとうございます。

中には、昨年に引き続き2年目となる方や、ご家族を説得しご家族とともに福島県に来られている方もいらっしゃると思います。

震災・原発事故は、我々から多くのものを奪っていきましたが、人と人との「絆」とは何か、人が人を思いやるとはどういうことかを改めて教えてくれました。

しかし、原発事故は収束にいたっておらず、避難生活を送っておられる方は15万人を超え、そのうち5万5千人を超える方々が県外に避難されています。

その一方で、事故そのものが人々の記憶から薄れ、その深刻さが忘れ去られたような動きさえ見られます。特に、食を支える福島県の農業は、依然として厳しい状況に置かれています。震災直後は、放射性物質の拡散範囲やその影響は全くわからず、雲をつかむような状況で、不安を抱えながら春を迎えようとしている農家にどのような支援ができるかを考える日々でした。

農薬や化学合成物質とは違い、農作物への直接的な影響が全く目に見えない、どの程度汚染されたらどのような影響が出るのかわからない中で、いわれのない中傷や批判を受け、心が折れそうになっている農家の方々にどう支援していいのか、自分は農家のために何ができるのか、このまま先の見えない日々がいつまで続くのか、震災直後から始めた電話による営農相談は、現在までに12,000件を超えました。

このような中で震災直後から続けられた農作物の放射性物質吸収抑制対策に関する試験研究の結果や農家等の協力を得て行った水稻の試験栽培の結果などから、カリ肥料の施用が農作物の放射性セシウム吸収を抑制できること、果樹の粗皮削りや樹体洗浄等に効果があることなどがわかってきました。

これらの技術対策に加え、出荷される農産物のモニタリング検査の徹底、米の全袋検査など、安全な福島県の農産物を届ける対策を徹底した結果、現在、福島県で生産される農産物から食品衛生法の基準値を超える放射性セシウムを含むものは市場に出回っておりません。

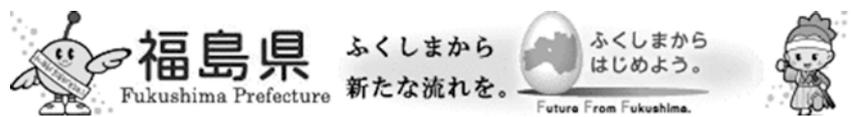
昨年の今頃は、何万袋とある米の全袋検査なんてできるわけないと誰もが思っていました。しかし、福島県の農家や農政に関わる者すべての、安全で美味しい福島県の農産物を全国に届けたいという想いが、1,000万袋を超える米の全量全袋検査をなしえたものと考えています。

今後とも、安全で美味しい農産物を全国に届けるため、そして避難を余儀なくされている方々に「福島県の農家はがんばっていますよ」というメッセージを発信していくためにも、この取組を確実に続けていけるよう、がんばっていききたいと思っています。

「ふくしまから はじめよう。～Future From Fukushima～」

八重の桜の言葉を借りれば・・・

「何かを始めようとするれば、何もしない奴らが、必ず邪魔をする。蹴散らして、前へ進め」  
同窓生の皆さん、福島県の農業は必ず復活します。応援よろしく申し上げます。





私たちは「包む価値」の創造を通じて  
快適な社会の実現に貢献します。

1914年、美しく繊細な生糸製品を海外へ送り届ける  
防湿・防水「ターポリン紙」の開発からZACROSの  
「包む価値」は歩みだしました。

素材に機能という“いのち”を与えてさまざまな価値を  
創造し、暮らしや社会に貢献することを目指してきた  
私たちZACROSは、まもなく創業100周年を迎えます。

次の100年も、お客様や市場と真摯に向き合い、  
さらなる貢献を続けてまいります。

**藤森工業株式会社**  
FUJIMORI KOGYO CO.,LTD.

代表取締役会長 藤森明彦( 工化S42 )  
<http://www.zacros.co.jp/index.html>  
160-0023 東京都新宿区西新宿1丁目23番地7号

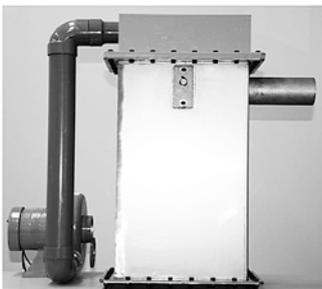
農工大発ベンチャー

## 株式会社アルマイト触媒研究所

〒 184-0012 小金井市中町2-24-16 農工大・多摩小金井ベンチャーポート105号室  
TEL/FAX : 042-401-1920 E-Mail : [actjimu@act techno.co.jp](mailto:actjimu@act techno.co.jp) HP : <http://act techno.co.jp/>

東京農工大学亀山研究室の研究成果としたアルマイト触媒を用いた脱臭装置、水素製造装置、オゾン発生装置、オゾン水製造装置の開発・実証実験を行いました。

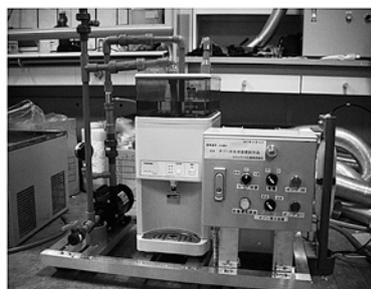
これらに関する製造技術の提供し、**パートナーを探しております。**



**小型脱臭装置(モジュール)**

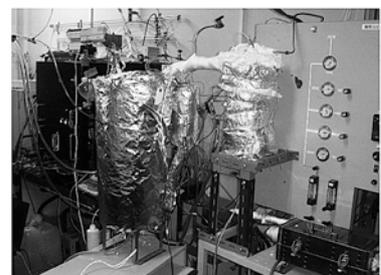
(従来装置との比較)

- ・消費電力 : 50%減
- ・設置スペース : 40%減
- ・起動の時間 : 1/5 短縮
- ・メンテナンス費 : 40%減



**オゾン水製造装置**

- ・用途 : 殺菌・消毒 (病院、動物病院、農業、畜産業)
- ・濃度 : 2~4 ppm
- ・発生量 : 4L/min
- ・消費電力 : 約 300 W



**水素製造装置**

- ・用途 : 燃料電池等
- ・原量 : エタノール水溶液 30% (バイオエタノール可)
- ・改質反応温度 : 500~550℃
- ・起動時間 : 1/3 短縮可

詳細は弊社ホームページをご覧ください。又、直接のお問合せをお待ちしております。

詳しくは

**井口一世** で検索してください。

カザミは、

お客様のニーズに合わせた

たれとソースを

作ります。



営業本部／工場 〒326-0044 栃木県足利市助戸1の26  
TEL0284(41)2527 FAX0284(44)2618  
本社／ 〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町2番4号楠沢ビル5階  
TEL03(5695)1671

たれとソースの総合食品 株式会社 カザミ

**有限会社 ラボプレクス**

【営業部】 東京都練馬区田柄2-53-1-201

電話 03-6761-0438 FAX 03-6761-0439

◆ 薬品／試薬管理システムChIM



バーコードを利用した  
在庫薬品の管理と  
薬品の仕様状況  
の検索が、容易に  
できます。  
さまざまな試薬会  
社の試薬に対応し  
ております。

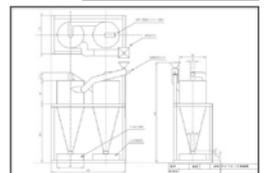
◆ ガラス加工

ガラス製理化学機器の製作を  
行っております。



◆ 金属加工

金属製理化学機器の設計製作を  
行っております。



◆ 計測機器等のソフトウェアプログラム製作

理化学機器の製作・販売の経験より、  
ユーザーに合わせたソフトウェアのプログラミングを行っております。

製作実例

- 画像録画用外部同期信号生成システム
- 高速画像記録・解析システム

## お疲れさまでした！ (前事務局長に聞く)



東京農工大学同窓会ならびに東京農工大学教育研究振興財団(旧後援会)の事務局長として7年4ヶ月に渡り本同窓会及び財団の発展に尽力していただきました山田昭一さんが平成25年9月30日をもって退職されました。同氏の行った事業を以下にまとめて示し、多大な貢献に感謝の意を示したいと思います。

在任期間	平成18年6月1日から平成25年9月30日(7年4ヶ月)
仕えた会長	第7代会長：畑中孝晴 第8代会長：藤森明彦 第9代会長：草野洋一
在任中行った事業	①後援会を教育研究振興財団に名称変更(平成19年度) ②(同時に寄付行為を定款に変更) ③新潟中越沖地震に伴う被災同窓生の把握活動・見舞金の送付(平成19年度) ④岩手・宮城内陸地震に伴う被災同窓生の把握活動(平成20年度) ⑤宮崎県の口蹄疫被害に伴う被害同窓生の把握活動・見舞金の送付(平成22年度) ⑥同窓会50年史制作のための座談会開催(同窓会の将来を語る)(平成22年度) ⑦東日本大震災に伴う被災同窓生の把握活動・見舞金の送付(平成23年度) ⑧同窓会50年史発行(平成23年度) ⑨公益法人制度改革により一般財団法人に移行(平成24年度) ⑩同窓会50周年記念事業式典等(平成24年度)
在任中行った改善	①賛助会費等の増収のための納付要請文の内容を改善(平成19年度) ②入会金等の現金納付から振込納付に改善(平成19年度) ③常務理事の兼業の手続化(平成19年度) ④同窓会・教育研究振興財団の看板設置(平成19年度) ⑤同窓会室への取付け道路の舗装化(平成21年度) ⑥自転車置き場の設置(平成21年度) ⑦50周年記念ホールの拡張(平成23年度) ⑧小金井地区にOB・OGホールの設置(平成23年度) ⑨同窓会資料室の設置(平成23年度) ⑩会則・規程等の見直し整理一元化(平成24年度) ⑪ホームページのリニューアル(平成24年度) ⑫農工通信年2回発行(平成24年度) ⑬一般同窓会員の総会構成員加入(平成24年度) ⑭集団部会の設置(平成24年度) ⑮会計システムの改善(平成24年度) ⑯会計ソフトの導入(平成25年度)
補佐した女性事務員	飯泉しずよ、小沢万里子、服部佳奈、檜垣さくら、村田房子、吉住靖子、吉村真理、米山美佐子、若林京子、渡辺啓子

退職の整理の忙しい中、インタビューしたことをまとめて示します。

**質問1 思い出深い事業についてお話し下さい。**

平成20年度の公益法人制度改革で、本財団も対象となり平成20年12月1日～平成25年11月30日の5年の間に公益財団法人に移行できるか否か、知識の乏しい私としてはガムシャラに関係する研修を受講したことを今更のように思い出します。

結果、本財団の事業は東京農工大学に限って寄附を行っているため公益性(不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与すること)が無いと内閣府が判断したため、一般財団法人への移行を余儀無くされました。この公益法人制度改革は大変な時間と予算を掛けたにもかかわらず残念な結果となり、苦く悔しい思い出となりました。

**質問2 事務局長の仕事をする中で最も楽しい思い出をお話し下さい。**

一般的に言って(趣味等を仕事にしている者を除いて)我々の業種では、仕事が楽しいと言う者は少ないと思います(例外の者を除いて)。しかし、仕事に不満等があっても使命感を持って仕事に取り組んでいる者が大多数の様に思います。私もこの類で、使命感を持って業務の改善等に取り組んで参りました。

**質問3 同窓会・教育研究振興財団の大学と社会に対するありがたい姿とこれから運営する人達への一言をお話し下さい。**

私が着任して一番感じたことは、大学の教職員及び大多数の同窓生は同窓会及び教育研究振興財団に対して、非常に関心が薄いと言う事でした。そのために、いかにしたら関心をこちらの方向に向けて戴けるか、業務の改善等を柱として取り組んで参りました。

例えば、賛助会費等の増収のための納付要請文の内容を大学学務部と連携のうえ改善、学部学生に対する奨学制度設置、HPに会員交流広場設置、集団部会の設置、小金井地区(エリブス内)にOB・OGルームの設置、50周年記念ホール拡張、等々を常務理事の先生方と計画を作成し、大学の教職員の方々と協力・連携のうえ実施するとともに、同窓生に関連する事業を行って参りました。そのため従前に比べて同窓会・教育研究振興財団の存在意識が多少は高まったと思っております。しかし、まだまだ関心をこちらの方向に向けて戴いたと言う状態にはなっておりません。

これは、同窓会・教育研究振興財団の「目的と言うか使命」が関心を薄くさせているのか知りませんが、今まで以上に、同窓生と大学の教職員との協力・連携関係を強化するとともに、業務の改善を辛抱強くコツコツと実施して行くしかないと思っております。

**質問4 これから山田さんはどうされるかお話し下さい。**

親戚の仕事の手伝いをしながら、たっぷりある時間を使って現役時代から続けている幾つかの趣味を楽しむことにしております。皆様のご協力を戴き無事に卒業することができました。7年4ヶ月の長い間、いろいろと有り難う御座いました。

同窓会・教育研究振興財団の益々のご発展を八王子の田舎から祈っております。

取材：亀山秀雄(化工S48)

### 学科・専攻略記表

略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名
農	農学科	製糸	製糸学科	化シス	化学システム工学科	機シス院	機械システム工学専攻
蚕糸	蚕糸生物学科	織工	織維工学科	電情	電子情報工学科	物生院	物質生物学専攻
植防	植物防疫学科	織高	織維高分子工学科	農院	農学専攻	MOT	技術リスクマネジメント専攻
農化	農芸化学科	化工	化学工学科	農工院	農業生産工学専攻	工博化	(博士)応用化学専攻
林	林学科	織化	織維化学科	環・資院	環境・資源学専攻	工博電	(博士)電子情報工学専攻
農工	農業生産工学科	工化	工業化学科	農環院	農業環境工学専攻	連農	(博士)連合農学研究科
獣医	獣医学科	機械	機械工学科	製糸院	製糸学専攻		
環・資	環境・資源学科	電気	電気工学科	織高院	織維高分子工学専攻		
環資	環境資源科学科	物生	物質生物工学科	化工院	化学工学専攻		

## お知らせ

同窓会会則改正により、平成25年度の総会から正副会長・支部長を始め、部会・支部から推薦のあった理事や代議員のほかに、60人以内の一般の会員も構成員に加えました。

毎年1月の同窓会ホームページにて募集しますので、奮ってご応募ください。

## 農工通信への寄稿・ご感想 お待ちしています！

- わが母校「農工大」への想いや激励はありませんか？
- 同窓同士の絆を深め、社会へのお役立ちのご提案は？
- 同好の士の交流も深めたいものです。

「農工通信」（後期号・毎年初発行）は同窓皆様の情報誌です。編集・作成も同窓生によるものです。気兼ねなく、ジャンルに捉われず、ご寄稿を期待しています。

たとえば、農工大への注文、大学時代の思い出、社会人としての経験、趣味のおもしろさ等々、同窓生交流の呼びかけも歓迎です。また、この「農工通信」は現役の学生には一つの社会人との交流の場・手段にもなります。他国立大学同窓会では、現役学生への支援に力を入れています。学生のためのご寄稿も大歓迎です。

質問・ご感想もお待ちしております。

「農工通信」編集委員会 [nokotusn@cc.tuat.ac.jp](mailto:nokotusn@cc.tuat.ac.jp)

## 編 集 後 記

本86号は、平成25年度後期号になります。この号は、同窓生の皆様からの寄稿により構成されています。編集は、集団部会「農工大支援ネットワーク」のメンバーが行いました。お陰様で当初予想を上回る多くの原稿をお寄せ頂き御礼申し上げます。編集予算の追加を常務理事会で了承いただき、全投稿原稿を掲載することができました。その中で、故西尾邑次名誉会長（農S17・9）の寄稿が遺稿として掲載されております。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集は、読みやすく、気楽に読めるように構成を配慮しておりますが、寄稿あつての編集ですので、引き続き同窓生の皆様からのたくさんの寄稿をお待ちしております。来るのが待ちどおしくなるような農工通信にしていきたいと思えます。読んで感じたご意見をぜひ同窓会にお寄せ下さい。皆様からの反響は、編集の励みになりますし、ご意見をなるべく反映させていきたいと思えます。2種類の農工通信が、同窓会会員皆さまの国内外ネットワークを築くことを願っています。

広報部長 亀山秀雄（化工S48）

編集委員：深水智明（織工S38）、中澤健雄（植防S45）、大亀哲郎（農工S46）  
峰松敏夫（農S47）、金子由実（織高S51）、荘司雅通（電情H9）

## 農工通信 第86号

発行日 平成26年1月1日

発行所 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 東京農工大学同窓会事務局  
TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail [info@tuat-dousokai.jp](mailto:info@tuat-dousokai.jp) URL <http://www.tuat-dousokai.org/>

振替口座 00120-9-93147番（加入者負担）

加入者名 東京農工大学同窓会

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

お中元、お歳暮、贈り物に最適  
部会、支部会、同窓会でも是非ご賞味下さい。

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター（FS センター）で栽培した原料（米・芋・麦）をもとに製造した農工大ブランドの本格焼酎「賞典禄（しょうてんろく）」を販売しています。

ご好評いただいております「賞典禄（しょうてんろく）」米・芋・麦の本格焼酎に加えて、米・芋・麦の熟成した原酒もそろい踏みとなり、ますます品揃えが豊富になりました。

この原酒は、本格焼酎の個性そのものが凝縮されている焼酎で、一味違う深い味わいを楽しめますので是非ご賞味下さい。



左から、原酒（米）、原酒（芋）、原酒（麦）

左から、米焼酎、芋焼酎、麦焼酎

【ネット販売対応商品】

商品種類	度数	容量	販売価格	商品種類	度数	容量	販売価格
原酒 米焼酎(つぼ入り)	43度	720ml	2,700円	米焼酎	25度	720ml	1,700円
原酒 芋焼酎(つぼ入り)	38度	720ml	2,700円	芋焼酎	25度	720ml	1,700円
原酒 麦焼酎(つぼ入り)	43度	720ml	2,700円	麦焼酎	25度	720ml	1,700円
				米・芋・麦 3種セット (専用の箱に入れて配送します)	25度	720ml×3	5,000円

ただいまインターネット販売により、多くの卒業生の皆様方にご愛顧を賜っておりますが、**配送先 1ヶ所につき 5,000円以上のご注文の場合には送料を無料**とさせていただきますので、是非ご利用下さい。  
代金の支払方法は、代金引換かクレジットカードになります。詳しくは下記URLをご覧ください。

ネットショップサイト：**FS センター農工夢市場ネットショップ**

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

**農工夢市場** で **検索** すると便利です。

同窓会のホームページ（事務局便り・お知らせ）からも本サイトに入れます。

※同封の「賞典禄 FAX 注文票」をご利用下さい。（FAX 042-367-5801）

※電話でのご注文はできませんので、予めご了承をお願いします。

**問い合わせ先** 農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務局 TEL 042-367-5812